吳梅村研究（前篇）

小松　謙
富山大學

吳梅村[1]（一六〇九～一六七一）は明末清初を代表する大詩人である。彼と時を同じうして錢謙益（一五八二～一六六四），陳子龍（一六〇八～一六四七），龔鼎孳（一六一五～一六七三）等，いずれ劣らぬ詩人達が陸續として輩出してはいるものの，梅村の作はその大衆的な人氣――通俗的であるというのではなく，社會のあらゆる階層に廣く受けいれられたという意味において――と，後世の詩人に對して與えた直接的影響の深さという點で，彼らをはるかに凌駕する。しかるにはなはだ不可解なことに，あの評論が極度に盛んに行なわれた清代にありながら，梅村の詩に對して正面から評價がなされた例は大變に少ない。わずかに例外として，趙翼が『甌北詩話』で李白・杜甫・韓愈・白居易・蘇軾・陸游・元好問・高啓とつらなってきた詩の正統を繼ぐもの，つまり明清の際における詩壇の第一人者として彼を規定し，その詩の評價に一卷をさいてはいるものの，趙翼がそこで述べていることの半ば以上は，梅村の詩の中にうたいこまれている歴史的事實に對する詮索と，靳榮藩が梅村詩のために加えた注釋『吳詩集覽』に對する批評とに終始しており，彼の詩自體にはあまり詳しくふれてはいないのである。これは何故か。

明末清初は，あらゆる意味において一つの轉換期である。政治においてはいうまでもなく，その他文學・哲學等樣樣な點において，ここで極めて重要な方向轉換がなされた。即ち，哲學においては理學・心學が沒落し，かわって漢學が學界の主流の位置を占めるに至り，文學においては錢謙益によって前後七子の擬古文學が葬り去られ，かわってさまざまな詩派が華やかに競い合う時期を迎えることになる。明末はいってみればこの變化の準備期であり，明代の文化と清以降生じてくるはずの文化とが衝突しあう時期であった。それゆえ，當時の文學者たちは皆おのれの信ずるとこ

ろに從って何らかの派に屬し，自らの論理によって他者と鬪爭をくりひろげたのである。錢謙益の如きはその最たるものであろう。しかるに吳梅村は，やはりこの時代を生きた文學者であるにもかかわらず，奇妙なほど自らの文學觀を語ろうとしない。その文集を通見したところで，彼が多少なりとも自らの文學觀を語っているとみなしうる文章は以外なほど少ない。しかもその說き方はあまり體系的とはいえない。また彼は『梅村詩話』なる著作を殘してはいるが，その內容も明代の多くの詩話とは異なり，詩と絡めて舊友たちのことを追憶する極めて古いタイプのものであって，その中で彼の文學觀が語られることはほとんど皆無なのである。つまり吳梅村は，この上なく論理的なる錢謙益とは全く對照的なタイプの，感覺的乃至は本能的な人物であった。この個人的にはごく親しい友人同士であった二人の大詩人における性格と行動の對比こそは，恐らくこの極めて興味深い時代の中にあって最も興味深い問題といえよう。この兩者の性格に起因する當然の歸結として，二人は全く逆の運命をたどることになる。錢謙益は乾隆帝によってその存在自體を否定されながらも，なおその論理によって後世の詩人たちを無言の中に縛り續ける。彼の詩は少なくとも表面的には社會から抹殺され，忘れ去られていくが，それでもなお，彼の理論はすべての清詩の前提として，暗默の中に承認され續ける。一方吳梅村は，その詩作品によって乾隆帝以下の後世の人人に絕大な影響を與え續ける。しかし何人も彼を理論によって正面から評價しようとはしない。理論をもたないものを理論の對象とすることは不可能である。かくてこの清初の二大詩人は，楯の表裏の如く，全く正反對のやり方で清朝の詩壇を支配していくのである。

吳梅村は，その理論によってではなく，その作品によって後世に影響を與えていく。彼が創出した華麗な七言歌行體による敍事詩型は，梅村體の名をもって無數の追隨者を生み，その影響力は清朝一代を通じて變わることがない。清末王闓運の「圓明園詞」の如きは，その最高の成就とみなすことができよう。だが，ここで留意しておく必要があるのは，「梅村體」とは歌行體——特に七言の——による敍事詩をさす名稱だということである。いうまでもないこ

とだが，吳梅村は歌行體以外の詩型を用いなかったわけではなく，また一生涯明の滅亡に捧げるエレジーばかりをうたっていたわけでもない。ここに後世の彼の詩に對する評價の偏向という問題が生ずる。

梅村の詩に對する最も公式の評價は，いうまでもなく『四庫全書總目提要』におけるものであろう。梅村の如く皇帝からみこまれてしまった詩人の場合，こうした公けの文書に記されたお上の評價がそのまま世に廣まっていくのは免れがたいことである。『提要』にはいう。

其少作大抵才華豔發，吐納風流，有藻思綺合，清麗芊眠之致。及乎遭逢喪亂，閱歷興亡，激楚蒼涼，風骨彌爲遒上。暮年蕭瑟，論者以庾信方之。其中歌行一體，尤所擅長，格律本乎四傑，而情韻爲深，敍述類乎香山，而風華爲勝。韻協宮商，感均頑豔，一時尤稱絕調。其流播詞林，仰邀睿賞，非偶然也。……惟古文參以儷偶，既異齊梁，又非唐宋，殊乖正格。……

若い頃の作品はおおむね華やかな才能が輝き出で，口をついて出る言葉はみやびやかに，「構想があやぎぬの如く織りなされ，さわやかな美しさが輝きわたる」(2)態の趣きがあった。國家の滅亡に遭遇し，興亡のさまを目にするに及んで，その作風は悲しくもものさびしいしらべをたたえ，その風格はいよいよ力強いものへと變ってきた。晩年の詩風はうらさびしく，論者は彼を庾信に比したものである。彼の詩の中でも歌行體はその本領とするところであり，格律は初唐四傑に基きながら，その趣きは四傑より深く，敍述のスタイルは白居易に似ているが，華麗さにおいて白居易にまさる。韻律はととのい，賢愚の別なくすべての人を感動させることができる。それゆえ一代の人人から比類なきものとしてたたえられた。文壇に流行し，陛下のご稱讃にあずかったのも偶然ではない。……ただ彼の古文は對句をまじえて，齊梁の風とはことなるが，といって唐宋の風でもなく，正しいスタイルに著しくもとるものである。……

恐らくは乾隆帝の考えを反映した評價なのであろうが，その說くところいずれも的を得ており，ほとんど文句のつけ

ようがない。確かに彼の作品中最もすぐれるのは歌行に他ならず，「格律は四傑に基き，……敍述は香山に類す」というのも後に說くように適評といえる。ただ問題は，こうした評價が下された結果，後世の人人が梅村の詩といえば「喪亂に遭遇し，興亡を閱歷した」結果生まれた「歌行一體」――つまりいわゆる「梅村體」の諸作のみを聯想し，梅村を亡國の哀しみに終生沈み續けた哀愁の詩人と規定してしまったこと，更にはここで「殊に正格に乖る」と烙印を押された散文を無視するようになったことにある。これ以降彼の集はほとんど詩の部分のみがあるいは『集覽』，あるいは『箋注』という形で注を附されて單行し，文は忘れ去られてしまうのである。しかしその「參ずるに儷偶を以てした」古文が全く意味を持たないと斷ずることは，これもまた早計にすぎよう。しかるに，從來の梅村に對する評價はついにこの『提要』の範圍をぬけだすことはできなかった。まことに乾隆帝の魔力はその歿後も文化界を支配しつづけ，數次の革命を經るとも人はその呪縛から脫れ去ることができなかったのである。

ここで我我は梅村に對する基礎的な研究をやりなおす必要があろう。吳梅村は四六時中亡國の思いに沈み，あるいは自らの變節に對する後悔の念にさいなまれつづけて，それを詩にうたいだすことのみに專念していたというわけでは決してない。彼には詩人以外の多くの顏があったのである。彼は詩人たると同時に文章家でもあり，思想家でもあり，史學者でもあり，戲曲作家でもあり，更には江南黨社運動の領袖でもあり，あるいは色街で浮名を流す遊び人でもあり，あるいは――これこそ彼にとって最も不似合なことであるが――權臣を彈劾する政客でもあったのである。これら多樣な側面から全人格的に把握していかないかぎり，吳梅村の人物とその文學を理解することは不可能であろう。本論では樣樣な角度から吳梅村の文學について考えていくことにより，同時に淸初における江南士大夫社會の實態，更にはこの時代相全體をもある程度理解していきたい。こうした作業にあたり，そのカギとしての役割を荷うには，恐らく吳梅村以上に適切な人物はいまい。彼は明末淸初多樣な分野で成立した無數のサークルのいずれにおいても，

その中核たるべき人間の一人として認識されていた人物だったのである。

一

一個の人物について考察を加えるにあたって，まず最初に把握すべきはその生育環境であろう。いかなる土地に生をうけ，いかなる人人に圍まれて成長したか。これはその人物の性格を決定する極めて重要な要因である。

吳梅村は萬曆三十七（一六〇九）年，太倉州に生まれた。太倉は古く戰國時代楚の春申君がここに倉庫を築いたことにその名の由來を持ち，以後崑山縣に屬してきたが，明の弘治年間に至って州として獨立した。現在は蘇州市に屬しており，上海の西北，蘇州の東にある蘇州の衞星都市の一つである。嘉定・崑山・常熟の諸縣と境を接し，蘇州・松江の兩府城からもそう遠くはない。しかも北は長江河口に面して崇明島とむかいあい，その名からも明らかなように，長江及び海運を利用して江南に搬出入される物資の集積場として代代穀物倉が建てられた土地であると同時に，倭寇をはじめとする海寇にしばしば惱まされる土地でもあった。蘇州を中心としたこの地域が近世において文化の中心であったことはいうまでもないが，明代後期においては，太倉はその中でも一際拔きんでた存在であった。その象徵ともいうべき人物が王世貞と王錫爵である。王世貞はいうまでもなく前後七子中最大の人物として復古派の指導者であり，一時代の文壇の主宰者ですらあった。その業績は決して詩文のみにとどまるものではなく，史學においては『弇山堂別集』の大著あり，通俗文學の面においても『藝苑卮言』に見られるように一代の評論家であり，また眞僞のほどはなはだ怪しいが，歷史劇『鳴鳳記』，更には『金瓶梅』の作者に擬せられる人物でもあった。また彼が繪畫にも造詣のあったことは，やはり『藝苑卮言』に見える通りである。一方王錫爵は，同じ王氏とはいえ王世貞とは全く別系統の出身であるが，張居正の衣鉢をつぐ形で長洲――つまり蘇州の人申時行とともに長期にわたって政柄を握り，萬曆後期における繁榮のはての爛熟の責任者といわれつつも，終生高い名聲を保ち續けた人物である。また彼は書家とし

ても名聲があった。この二人がともに世にあった頃が太倉の最盛期といえよう。

彼らが歿して後，太倉は梅村の言葉をかりれば「愁苦焦瘁の聲作りて休風見る可からず」(3)という狀況に陷りはしたものの，兩王の子孫は相變らず繁榮をつづけ，錫爵の孫王時敏と世貞の曾孫王鑑とは，董其昌の後繼者として後に「四王吳惲」の名をもって呼ばれることになる明末清初畫壇を支配したグループの中心人物であった。彼らは梅村の年長の友人として，深い影響を與えていくことになる。

太倉自體がかかる文化的土壤を有する地であった上に，ほぼ一日行程の距離にある常熟には既に文壇の主宰者たる地位を確立しつつあった錢謙益あり，蘇州には馮夢龍ら萬曆爛熟期の流れをくむ文化人たちがなお多く活動を續け，松江には美術界の帝王ともいうべき董其昌と彼と並稱される陳繼儒があり，そして隣縣嘉定には錢謙益が稱讃してやまぬ「嘉定の諸老」程嘉燧・李流芳らが詩文に書畫に活潑な活動を續け，今一つの隣縣崑山は崑曲發祥の地として，その隣縣吳江の沈璟を中心とした吳江派戲曲作家らの活動の場であると同時に，歸有光以來の唐宋派古文の傳統を傳える地でもあった。これら諸都市は江南獨特の縱横に發達したクリーク網によって緊密に結ばれ，相互の間には絶え間のない往き來がなされていた。梅村はかかる文化の淵藪ともいうべき土地に，その文化が爛熟の極みに達した萬曆末年，生まれたのである。

では彼の家柄はどのようなものだったのであろうか。梅村の父吳琨は，恐らく江南にはごく普遍的に見られたであろう貧乏知識人であった。しかし吳氏が代代貧乏人であったというわけではない。顧師軾の『梅村先生年譜』の前に附された『梅村先生世系』によると，吳氏は梅村から數えて七代前に，元末の兵亂を避けて河南から崑山にうつってきたのだという。その字が子才というのみで，「名無考」というのだから，無名の流民だったのであろう。つまり明代に入ってから興った一族であって，決して名門とはいえない。官途についたのは子才の孫凱にはじまる。凱の子——つまり梅村の四代前——愈は成化十一年に進士となり，河南參政までのぼった。この人物は當時蘇州府の名士の一

人であったらしく，梅村が「京江送遠圖歌」[4]序で述べているところによると沈周の友人であり，文徵明はその女婿であった。つまり東林黨末期の領袖文震孟と文震亨の兄弟は，梅村とは遠い姻戚關係にあったことになる。事實，震亨の子文果は梅村の友人であった。[5] 愈の代で吳氏は一應士大夫階級の仲間入りを果たしたものと思われるが，愈の孫——梅村の祖父——の代になって沒落する。この沒落の原因については，梅村自身が「先伯祖玉田公墓表」[6]で次のように語っている。

余祖嘗抱偉業於膝，顧叔祖而歎曰，爾知吾宗之所以衰乎。三世在宦，廉吏之橐，固足以傳子孫。爾伯祖實主帑，用之爲飲食裘馬費，產遂中落。余與爾叔祖庶出也，少孤貧。余祖亡後，祖母湯孺人每談及鴻臚公時事，輒言嘉隆中鹿城有倭難，伯祖自以私財募兵千餘人，轉戰湖泖間，兵敗，左右皆歿，得一健卒負之免，家遂以破。

祖父(議)が私を膝にのせて，大叔父(誥)の方をふりかえりながら歎いてこうおっしゃったことがあった。

「お前はうちがなぜおちぶれたか知っているかい。三代續けて役人になったんだから，清廉な役人だったといっても，もちろん子孫に殘すぐらいのたくわえはあったのさ。なのにお前の大伯父さん(諫)が財產を管理するようになって，全部飲み食いやら衣裳やら馬やらにつかっちまったんだ。それで財產もおじゃんになってしまったんだよ。わしと大叔父さんは妾腹だしね，それで小さいころから身よりもなくて貧乏だったのさ」。祖父がなくなってから，祖母の湯孺人は鴻臚公(曾祖父南)の頃のことを話すたびにいつもこうおっしゃったものだ。嘉靖・隆慶の頃倭寇が太倉を襲ったことがあった。大伯父は自身私財をなげうって千人あまりの兵を募り，太湖・泖水のあたりで轉戰したあげくに敗北，身邊のものは全滅，元氣な兵隊が背負っていってくれたおかげで命ばかりは救かったが，家はそれで破產したのだ，と。

祖父母二人の話は一見食いちがっているようだが，おそらくは事實の兩面を示すものなのであろう。つまるところ吳

氏は梅村の大伯父諫が派手好きな，遊俠の風のある人物だったために沒落したのである。この記述には二つほど留意しておく必要のある事實が含まれている。一つは吳氏が當時無論誇張はあろうが千人の兵をやとうほどの財產と聲望を持っていたということ，つまり吳氏は河南から來た流民の出でありながらこの時期にはおそらく江南でも屈指の大族となっていたのであろう。梅村の曾祖父南は愈の長子ではなく次子である。南の兄弟東・西の二人も當然それぞれかなりの勢力を持った家を形成していたとみるべきであろう。梅村の親友であった吳繼善・吳國傑・吳克孝ら一族の人人は，その系列を定かにしないが，このあたりでわかれたのかもしれない。いま一つの注意すべき點は，梅村がこの話を幼少の頃子守歌のように聞かされて育ったということである。祖母湯孺人は，後に見るように梅村の事實上の養育者であった。その人が「鴻臚公の時事を談ずるごとに輒ち言へらく……」というのであるから，まだ幼かった梅村にくりかえし何度も同じ話をしたのであろう。この幼兒體驗が後に家門に對する誇りと海寇に對する恐れ——つまり鄭成功・張名振らへの冷淡さ——という形をとってあらわれるのではなかろうか。

梅村の祖父議は，おそらく兄と不仲になったためであろうか，崑山を離れて太倉に移住した。さきの墓表の續きの部分で，諫の血筋とは隣縣に住みながら梅村の代まで交際がとぎれてしまった旨を述べている點から見ても，この兄弟は平和的に別れたというわけではなさそうである。議も結局右の文に見えたように貧士のままおわり，息子の琨——梅村の父——が家を繼ぐこととなる。

吳琨については梅村の言葉を借りるのがよかろう。

吾父亦窮書生也。……吾父之有聲場屋，而屢試不收，祖母湯淑人已老，家貧無以爲養。(7)

私の父も貧乏書生だった。……父は試驗場で評判が高かったにもかかわらず，何度受驗しても合格せず，祖母の湯淑人は年老いていたのに，貧しくて養うこともできないありさまであった。

結局彼は博士弟子員におわった。貧家に生まれ，官途にもつけなかった以上，この人物がいかなる手段によって生活

の糧を得ていたかははなはだ疑問であるが，紐琇『觚賸』にみえる次の記事はその生活の一端を示すものであろう。

……時王氏二長子已受業同里吳蘊玉先生。蘊玉者梅村先生父也。而太虛教其第四五諸郎。兩人共晨夕甚歡。梅村甫髫齡，亦隨課王氏塾中。李奇其文，卜爲異日偉器。……(8)

……當時王氏（王在晉）の長子・次子は同郷の吳蘊玉先生について學んでいた。蘊玉とは梅村先生の父である。太虛（李明睿）はその第四子・五子を教えることとなった。李吳兩人は朝夕をともにして大變たのしく暮らした。梅村はそのころまだ幼兒であったが，やはり王氏の塾で勉强していた。李はその文を奇として，他日大物になろうと思っていた。……

王在晉は太倉の人，兵部尚書にまでのぼった。この後のくだりで李明睿は王在晉の息子とけんかをして屋敷をとびだすことになるのだが，『研堂見聞雜錄』によると王在晉の子らは父の權勢をかさに着て惡業の限りをつくし，ついに家を破るに至ったというから，その塾でともに學んだ梅村もかなり屈辱的な經驗をしたかもしれない。ともあれ，この記事から察するに，吳琨は土地の大官の屋敷で家庭教師をして生活していたように思われる。つまり梅村は，貧しくはあっても學問するには不自由のない環境の中で育ったことになる。

こうした環境で吳梅村は成長したわけである。この太倉という土地と周圍の人人が彼に及ぼした影響には，まことに大きなものがあったに違いない。まずその第一にあげるべきは，この土地が王世貞の出身地であったという事實であろう。つまり梅村は，徹底的に復古派たるべき環境の中でその基礎教育をうけたのである。彼の王世貞に對する尊敬の念は終生かわることなく，この他人の文學を論ずることを好まない人物の文集の中にあって，王世貞の名のみは常に敬慕の思いをこめた口調で隨所に現われる。また王世貞・世懋兄弟の子孫たち——世貞の曾孫鑑と世懋の孫瑞國・曾孫昊はいずれも梅村の友人であり，とりわけ瑞國の息子には娘を嫁がせ，昊はともに復社十哲に名を列ね，後には太倉十子の一人として彼の最も主要な追隨者となるこ

ととなる。そして彼が後に居を定めた「梅村」は，王世貞の子士騏の邸址であった。こうした環境からみて，彼が少なくともその若年期においては復古派系統に屬する人間となったのは當然のことといえよう。

ただここで留意しておかねばならないのは，この時期の復古派は既にかつての李何王李全盛時代のものとはかなり變質していたということである。既に王世懋・王士騏が世貞に對してある程度批判的であったといわれるが，(9) 世貞自身もその晩年にあっては，李攀龍の呪縛から解放されたためか，かつてのような强烈な復古志向はなくなり，むしろ文においては唐宋派と融和し，詩においても元白の體や宋詩的なものをも許容していこうとする姿勢を示している。(10) それゆえ太倉に復古派の本場としての雰圍氣が依然としてかなり濃厚にただよっていたとしても，その內容はかつてのようなリゴリスティックなものではなく，より廣い間口をもつものとなっていたはずである。しかも隣縣の常熟・嘉定には錢謙益・程嘉燧ら復古派批判勢力が强い影響力を發揮しつづけ，松江には董其昌・陳繼儒ら公安派の流れをくむ人人が長老として嚴存したのである。江南自體の風氣が一變している以上，太倉もかつてのままの太倉ではおれまい。その傾向はやがておこる張溥らの復古運動においてよりはっきりと認められることになろう。

第二に，梅村の周邊に滿ちみちていた文人的雰圍氣，特に美術に對する嗜好を考慮しておかねばなるまい。さきにも述べたように，彼の五世の祖愈は沈周の友人であり文徵明の岳父であった。梅村幼少の折，彼の家には文徵明の尺牘が大量に殘されていたという。(11) つまり彼は幼少の頃から常時最高の書畫の手本に慣れ親しんできたわけである。そして友人の王時敏・王鑑は當代最高の畫家であった。そもそも吳中は沈周以來文人畫の本場である。しかもこの地にあってこうした特に惠まれた環境に生育した以上，梅村に强い美術志向が生じたとしても不思議はない。後に彼が一かどの畫家となり，おびただしい量の題畫詩と繪畫的な描寫をもつ詩を殘す素地は，生まれながらにして備わっていたといえよう。

二

かかる環境のもとで梅村がどのような幼少時代を送ったかについては，資料が少ないため定かには知り難い。梅村は自らを語ることを好まない人物である。それゆえ錢謙益のように自分の幼少期の思い出を物語るということもあまりしない。彼の傳記的資料としては顧湄の行狀・陳廷敬の墓誌銘・顧師軾の年譜があるものの，いずれも甚だ不充分で信を置きがたいものばかりである。彼自身が自らを語ること最も詳しいのは，彼がその死に先だつこと一ヶ月，康熙十年十一月二十八日にまだ幼い息子のために書き殘した遺書「與子暻疏」[12]であろう。この文は本人の手になるという點で――もとより逆に自己粉飾の可能性も否定できないが――文書の性質からいっても最も信頼のおける資料ではあろう。そこで梅村は自らの幼年期について次のような描寫をしている。

吾少多疾病，兩親護惜，十五六不知門外事。

私は幼い頃から多病で，兩親が大切にしてくれたものだから，十五、六歳になっても門の外のことを知らなかった。

更に「秦母于太夫人七十序」[13]にはいう。

衰門貧約，吾母操作勤苦，以營舅姑滫瀡之養。湯淑人憐其多子，代爲鞠育。余自少多病，由衣服飲食，保抱提攜，唯祖母之力是賴。

落魄した家で貧しかったため，母は懸命に働いて夫の父母の世話をしたが，湯淑人（祖母）は子供が多いことを氣の毒に思って，かわりに面倒をみることとした。私は幼いころから多病だったので，衣食以下すべての世話については，祖母だけを賴りとしていた。

ひよわな子供が祖母から溺愛されて育ったわけである。しかもほとんど外出しないという純粹培養であった。「十五、六歳にして門外の事を知らず」とは無論ある程度の誇張を含む表現であり，「嘉議大夫按察司江公墓誌銘」[14]によると，七歳にして江氏の家塾に學んだという。更に，彼が生涯を通じての親友穆雲桂のために書いた「穆苑先墓誌銘」[15]には，その幼少期の狀況がある程度詳しく描寫されて

いる。

自余生十一始識君，居同巷，學同師，出必偕，宴必共，如是者五十年。……余之初就君齋讀書也，有同時游者四人，志衍、純祜爲兄弟，魯岡與之共事，其輩行差少，皆吳氏余宗也。鄰舍孫令修亦與焉。……

私は十一歳のときはじめて君（穆雲桂）を知って以來，同じ町にすみ，同じ師に學び，出かけるときは必ずつれだって，宴會の折にも必ずともに行き，かくの如くして過ごすこと五十年。……私が穆君の屋敷の書齋で勉强をはじめた當初，ともに學んだ者は四人，志衍（吳繼善）・純祜（吳國傑）は兄弟の代にあたり，魯岡（吳克孝）はその仲間であったが世代は少し下，この三人は皆わが吳氏一門の人間である。隣家の孫令修（以敬）もこれに加わった。……

また「志衍傳」にはいう。(16)

余年十四識志衍。志衍長於余三歳，兩人深相得。又六年而人撫、純祜相與砥礪爲文章，人撫志衍與余同魁。

私は十四歳のとき志衍と知りあった。志衍は私より三歳年長だったが，大變氣の合う間柄だった。更に六年がすぎて，人撫（克孝）・純祜とともに切磋琢磨して文章をつくり，人撫と志衍と私とは鄉試に合格した。

更に「送志衍入蜀」詩(17)にはいう。

我昔讀書君南樓　昔君の家の南樓で勉强した折は
夜寒擁被譚九州　寒い夜にふとんを抱えてこの廣い國の話をしたものだ

要するに梅村は十一歳から十四歳にかけての時期，一族の者三人及び穆雲桂・孫以敬と，穆雲桂や吳繼善の屋敷で勉强會を開いていたらしい。この時ともに學んだ五人の仲間は梅村終生の友となると同時に，後に復社の中核をも形成することになる。

こうしてあるいは王在晉の家塾で，あるいは穆雲桂や吳繼善の屋敷でと，貧しいがために他家で勉强していた梅村に，運命的な出會いが訪れる。張溥との邂逅である。この梅村の人生を大幅に狂わせることとなった出會いがいつ生じたかは定かではない。顧湄の「吳梅村先生行狀」にはいう。

時經生家崇尚俗學，先生獨好三史。西銘張公溥見而歎曰，文章正印其在子矣。因留受業，相率爲通經博古之學。

その頃の經生はみな俗學を尊ぶ者ばかりであったが，先生だけは三史を好まれた。西銘（張溥の號）張溥が先生と會って感嘆してこう言った。「文章の正宗をつぐ者は君だ。」そのまま張溥の元にとどまって學問を受け，ともに通經博古の學をおさめられた。

一方陳廷敬の「吳梅村先生墓表」によると，兩者の出會いの契機は次のようなものであった。

先生少聰敏，年十四能屬文。里中張西銘先生以文章提唱，後學四方走其門，必投文爲贄，不當意卽謝弗內。有嘉定富人子竊先生塾中藁數十篇投西銘，西銘讀之大驚。後知爲先生作，固延至家。同社數百人，皆出先生下。

先生は幼くして聰明，十四歳にして文をつくることができた。同鄕の張西銘先生は文章を提唱せられ，後學の徒はいたるところからその門へと赴いたが，その折には必ず文章を土產がわりにさしだすこととなっており，その文が張溥の意に滿たなければ謝絕して中にはいれてもらえない定めであった。嘉定の富人の子で先生が家塾でつくった原稿數十篇を盜んで西銘にさしだしたものがいた。西銘はこれを讀んで大變驚き，後になって實は先生の作だと知って，むりやり自分の家まで招きよせたのである。復社の同人數百人，ことごとく先生には及ばなかった。

顧師軾の『年譜』が兩者の出會いを天啓二年，梅村十四歳の時のこととするのは，おそらくこの記事を根據とするのであろう。ただ一讀すればわかるように，陳廷敬は梅村が十四歳で文をつくることができたと言っているだけで，その後で述べている逸話については，その時期を明言していないのである。またこの逸話自體あまりにも小說的で信じ難い。事實，程穆衡が『婁東耆舊傳』で說くところはこの記事とは全く異なり，前記李明睿が王在晉のもとをとびだした折，わざわざ追いかけてきてはなむけをしてくれた吳琨に，梅村を張溥のもとに弟子入させるよう勸めたのだと

いう。これも年代的に少し無理があるように思われるが，要するに崇禎辛未の試で師弟ともに及第して一躍有名人となった結果，彼ら師弟の結びつきについてさまざまな傳說が生じたものであろう。特に『婁東耆舊傳』の說は，李明睿が辛未の試の房師であったことと吳張兩人の及第を結びつけようとする意圖が感じられて，一際疑わしい。結局のところ兩人の出會いについて詳しいことは何もわからないというほかないが，ともかく十代後半に吳梅村が張溥のもとに入門したことは確かであろう。さきにあげた梅村の五人の友も，皆相前後して張溥の門下に入ったもののようである。

この事實は吳梅村の人生において決定的な意味をもつ。その將來の榮光と悲劇とはことごとくここに胚胎するといっても過言ではあるまい。無論この當時江南の年少知識人は，その大半が復社に關係してはいた。しかし梅村における復社への參加がもつ意味は，例えば顧炎武におけるそれとは基本的に意味を異にする。梅村は張溥の「入室弟子」[18]だったのである。換言すれば復社の中核中の中核であり，「復社十哲」の筆頭であった。この結果彼は好むと好まざるとにかかわらず，死ぬまで社事にしばりつけられることになる。しかも彼が張溥と出會ったのはまだ十代後半，自我が確立しきっていない時期である。それまでの梅村は，さきにみたように，病弱で門外のことをほとんど知らず，祖母に溺愛されて育った子供であった。友とてさきの五人にほとんど限られていたであろう。そうしたひよわで，ただ文學的才能だけは人並はずれたものをもっている少年が，張溥の如き他者に對して異常なまでの支配力をもつ强烈な人格の持ち主に出會ったとき何がおこるかは，想像に難くあるまい。これ以後梅村の生涯を通じて認められる尋常ならざる主體性の缺如は，その幼年期を通じて釀成され，ここに至ってついに完成したと考えることができよう。

更に，張溥との出會いが梅村に及ぼした文學的・思想的影響にもまたはかりしれないものがある。この點について考察を加えるためには，まず張溥及び復社の思想を認識しておく必要があろう。以下この問題について，簡單にふれてみたい。

張溥と復社は一般に，文學的には復古派の繼承者，政治的・哲學的には東林黨の後繼者とみなされている。しかし從來は，その殘した足跡の大きさから當然のことながら，專ら政治的側面のみに注意が集中した結果，彼らの文學的・哲學的立場についての認識は，根本的に缺如していたといわざるをえない。しかし梅村について考える場合，この點は絶對にはずすことのできない重要な要素なのである。

「復社」とは「絶學を復す」の意である。[19] この事實からしても，彼らが文學的には前後七子の直系の子孫であることは自明であろう。まして張溥は太倉の出身である。彼が自ら王世貞の後繼者をもって任じていたであろうことは，想像に難くない。この傾向は，復社とほぼ同一歩調をとっていた松江の夏允彝・陳子龍らの幾社においても同樣に看取される。ただ兩者の相違は，復社が「意は廣大を主とし」[20]た，多分に政治的色彩の強い結社であったに比し，幾社は「簡嚴を主」とする，學究的な團體であった點にある。このように言うと，復社が「絶學を復す」ることを標榜するのも看板倒れのように聞こえるかもしれないが，復社もその出發點においては純粹に學問的組織であったものが，後に張溥等によって變質させられてしまったのである。この點については梅村が「顧母陳孺人八十序」[21]で詳しく語っている。

當先朝啓禎之際，吾州文社擅天下。先師西銘偕受先讀書七錄齋，相繼取科第。而麟士與子常談經講藝於江邨寂寞之濱。遠近目之曰兩張，曰楊顧，初不出處隱顯有所軒輊也。

先朝(明)天啓・崇禎の折，わが太倉州の文社は天下に冠たるものであった。わが先師西銘(張溥)は受先(張采)とともに七錄齋で學問に勵み，あいついで科擧に合格した。しかし麟士(顧夢麟)と子常(楊彝)はさびしい長江べりのこの町で經學を講じ，世に出ようとはしなかった。世の人人はこれを目して「兩張」「楊顧」と呼んだが，彼ら自身は出處隱顯の差ゆえに反目しあうことはなかったのである。

後に計東はその「上吳梅村祭酒書」で，梅村が「復社紀事」において楊顧の存在を無視したことを激しく攻擊した

が，梅村と顧夢麟の關係がおそらく良好であり，[22] 夢麟の義子顧湄が梅村最愛の弟子となった點から考えても，これは梅村が「復社紀事」で述べようとしたのが政治結社としての復社であったことによるものではないかと思われる。ともあれ復社もその出發點においては，幾社同樣復古主義の旗幟をかかげた學問的團體だったのであり，後に政治集團化し，嚴格なイデオロギー性を喪失してからも，少なくともその中核にあった太倉の人人の間では，この精神は保持しつづけられたものとみることができよう。

こうした復古主義を標榜する結社であった復社・幾社と文學上最も激しい對立關係にあったのは，唐宋派の後繼者を自認する艾南英に率いられた江西の諸社であった。この對立は單に文學的イデオロギーの差のみに起因するものではなく，兩者が受驗產業としてもライバル關係にあったことが，現實的にはより大きな要因であったと思われる。[23] 一時的に兩者が手を結んだこともあったが，やはり根源的な文學思想の違いは如何ともなしがたく，結局決裂せざるをえない。そして崇禎元年，艾南英と陳子龍の間で名高い論爭がたたかわされることになる。この事件ほど兩者の思想と人格を如實に示すものはあるまい。しかも舞臺は太倉である。陳子龍の『自撰年譜』にいう。

崇禎元年戊辰，秋，豫章孝廉艾千子有時名，甚矜誕，挾詭詐以恫喝時流，人多畏之。與予晤於婁江之弇園，妄謂秦漢文不足學，而曹劉李杜之詩，皆無可取。其詈北地、濟南諸公尤甚。衆皆唯唯，予年少在末坐，攝衣與爭，頗折其角，彝仲輩稍稍助之，艾子詘也。然猶作書往返，辯難不休。

崇禎元年戊辰，秋，豫章（南昌）の擧人艾千子（南英）は名聲あり，甚だ傲岸，でたらめをいっては時流を恫喝し，世人には彼を畏れる者が多かった。私は太倉の弇園で彼と會ったが，彼は秦漢の文は學ぶに足らず，曹植・劉楨・李白・杜甫の詩はみな取るに足らぬ，などと妄言を吐いた。北地（李夢陽）・濟南（李攀龍）兩公に對する惡口は特にすさまじいものであった。人人は皆ハイハイというばかり，私は年少の身で末座に連なっていたが，衣をとってこれと爭い，いささか言いま

かしてやった。彝仲（夏允彝）らも助けてくれたので，艾子は敗北したのである。しかもその後も手紙を往復し，議論を續けた。

太倉の，それも他ならぬ弇園――王世貞の邸宅――で，公然と復古派批判をする艾南英も甚だ挑戰的ではあるが，これにわずか二十一歳の若さで猛然と反論した陳子龍も，極めて早熟かつ大膽であったといえよう。ところが杜登春の傳えるところでは，陳子龍は更に過激であった。(24)

臥子……行年二十餘，已奮螫登城。曾於七錄齋中與艾千子肆論朱王異同，以手批千子頰。其才氣鋒利如此。

臥子（陳子龍）は……行年二十餘にしてはやくも幾社の主力であり，七錄齋で艾千子と朱王の異同について激論をかわしたすえに，手で千子の頰をなぐりつけたことがあった。その才氣鋭きことかくの如くであった。

要するにこの事件も傳說化した結果，內容が種種に變化したものであろう。杜氏の說では議論の內容が哲學的なものに變化し，場所も七錄齋（張溥の書齋）にうつってはいるが，陳子龍と艾南英が太倉で議論したという事實にかわりはない。

この時梅村は二十歳。陳子龍とはわずか一歳の差である。場所も太倉であり，彼がこの席に居合せた可能性はかなり高い。事實彼の「復社紀事」には，この事件があたかも目擊者の如き口吻で記されている。おそらく彼はこの時座に連なっていたとしても「唯唯」としていた衆人の一人だったのであろう。陳子龍の行動と吳梅村の傍觀という圖式は，この後たえずくりかえされることになる。

さて，この逸話が示しているものは，單に陳子龍と艾南英の性格だけではない。艾南英の發言に陳子龍が激怒したのは，いうまでもなくその內容――「秦漢の文は學ぶに足らず，曹・劉・李・杜の詩皆取るべからず」――が彼ら――復社・幾社――の主義に正面から挑戰するものだったからである。この一事をもってしても兩社が李何王李の後繼者たることは自明であろう。ただ注意しておかねばならないのは，さきにも述べたように復古派自體が王世貞の後半生から變質を開始しており，周圍の狀況すべてもそれを加速度的に推し進めるものであったという事實である。そ

れゆえ復社・幾社の復古は，もはや「北地濟南」の復古と同じものではありえない。その端的なあらわれが張溥による『漢魏六朝百三家集』の出版である。李何王李四者の模範とするところは，一口に「文は秦漢，詩は盛唐」とはいうものの，實際には人によってかなりの差があった。とはいえ一般に詩においても六朝でとるところは陸機・潘岳・三謝・陶淵明の域を出ず，文においては六朝期の駢文はむしろ忌避の對象ですらあった。しかるに張溥はここで六朝文學の再評價と駢文復興を主張したのである。この傾向は張溥一人にのみ認められるものではなく，あの前後七子の後繼者をもって自認していた陳子龍ですら，多くの駢文をつくり，ついには『明史』本傳[25]で「駢體尤精妙」と評されるに及んでいる。つまり駢文志向は復社・幾社に普遍的な現象であった。また李攀龍がひどく嫌った元白の體に對しても，既に王世貞が高い評價を與えており，[26] 陳子龍にも「新樂府」の作があることからも明らかなように，もはや排除されるべき對象ではなくなっているように思われる。つまり復社・幾社における「復古」の典型は，前後七子のそれに比してはるかに幅が廣いものとなっているのである。

更に今一つ重視すべきは，彼らの思想的・學問的態度であろう。明代を最も特徴づける思想は，いうまでもなく王陽明の心學である。陽明歿後，彼の後繼者達は左右兩派に分裂し，更にその內部でも分裂をくりかえし，朱子理學の徒とあるいは接近し，あるいは反目し，その多くは佛教に近づいたすえに甚だ空疎な理論のみを玩ぶに至った。この狀況を救濟すべく立ちあがったのが復社の先驅であり，復社よりはるかに濃厚な思想性をもっていた東林黨である。彼らは朱子の昔にたちかえることを原則としつつも，その內部に陽明學的要素をも巧みに盛りこみ，一方では李卓吾の如き過激派を自らの手で死に追いやって，[27] 劉宗周・鄒元標ら陽明學右派の泰斗をもその同調者とすることに成功した。この東林黨の廣い學風とそのメンバーの高潔な人格が影響してか，明代末期に至って思想的混亂狀況は一應の小康を得たかのように思われる。その後をうけて現われたのがこの復社・幾社の人人であった。

復社は「絕學を復す」學問結社を看板としてはいたが，

内實は文學結社であり，更にその内實は受驗豫備校的結社，ひいては政治結社であった。それゆえたとえ政界の正義派として東林黨の後繼者を自認し，他者からは小東林と呼ばれようと，その基本的な性格は全く異なる。東林黨は嚴格な正義派人士の集團であり，彼らの中には顧憲成・高攀龍ら思想史上に名を留める人物はあっても，文學的にすぐれた業績をあげた人物は，東林中の異端者として「浪子」の異名をとった[28]錢謙益を除いては皆無といってよい。それゆえ彼らは同時代の文學者たちが相も變らず繰り返していた復古派と唐宋派の論爭や，演劇界における吳江派と臨川派の對立とは全く無緣であった。しかるに復社はそうではない。文學結社にして思想結社にして政治結社というこの集團にあってはじめてこの三つの要素は結合し，融合し，彼らの運動は社會全體をまきこんでいくのである。そしてそこから清初の文化が生ずることになる。それゆえ復社を論ぜずしては清初の文化を論ずることはできない。

復社の重要性は，奇妙なことだが，その業績の中今日最も輕視されている思想的側面において，實は最も顯著に看取されるのである。先にも述べたように，復社とは「絕學を復す」の意である。このスローガンは，おそらく前後七子の文學における復古運動から直接にうけつがれたものであろう。つまりこれまで互いに沒交渉に展開してきた文學と哲學とが，ここにおいて合一するのである。前後七子は秦漢にもどることを說いた。彼らのこの主張はあくまで文學上のものであり，おそらくは錢謙益が彼らを嘲笑する際常に用いる言い方に從えば，彼らが「無學」であったがゆえに，この手法を文學以外の分野にまで推し進めることには思い至らなかったのである。しかるに無學とは程遠い人物であった王世貞の出現によって次段階への準備がなされ——彼の歷史學關係の著作が非常に高い價値を有することは周知の通りである——若い頃王氏の影響を受けたという錢謙益により更に地ならしがなされ，[29]ここに「絕學を復す」——つまり古學を復興することをスローガンとした復社が成立したわけである。彼らのいう「絕學」，更にはさきにあげた顧湄の「行狀」にいう「俗學」及び「通經博古之學」なるものが何であるかは容易に明らかにしがたいが，

梅村の次の言葉はその內容を暗示するものであろう。

吾州自西銘先生以教化興起，雲間夏彝仲、陳臥子從而和之，兩郡之文遂稱述於天下。人止見其享盛名，掇高第，奉其文爲金科玉條，不知西銘之書羽翼經傳，固非沾沾一第已也。(30)

わが太倉州で西銘先生（張溥）が教化によって立ち，松江の夏彝仲（允彝）・陳臥子（子龍）が續いてこれに和し，かくて兩郡の文は天下の範となった。人は彼らが盛名を享受し，科擧に及第していることだけを見て，その文を金科玉條の如くに奉じるばかりで，西銘の書が經傳をたすけるものであって，科擧及第に汲汲とするものでは決してないことを知らないのである。

その他これに類した言葉は梅村の文集中隨處に認められ，「經傳に羽翼たる」ことは梅村の主張の特色をなすものとさえなっているわけであるが，これは師からうけついだ考え方であること，右の一文からも明らかであろう。更に『明史』藝文志(31)にあげる張溥の著作の中に『詩經注疏大全合纂』，顧夢麟に『十一經通考』の如き注疏の研究を中心としたものがあることは，彼らが經學を志向していたことの一つの現われといえよう。惜しむらくは後にその性格が著しく政治的なものとなった結果，この主張はほとんど看板倒れにおわり，何ら見るべき業績を殘すことはできなかったが，その精神は清初の漢學者達にうけつがれることになる。顧炎武・黃宗羲がいずれも復社乃至その餘派の出身であることは，その一傍證となろう。更に清代漢學派が多く駢體文を鼓吹したことも，復社による駢文復興と考えあわせると，甚だ象徵的といわざるをえない。

こうした集團の中核にあって，二十歲前の梅村は何を學んだのか。まず第一に制擧の學であろう。復社が特にその初期段階においては受驗豫備校的性格を有していたことは，先述の通りである。更にこれもさきにひいた顧湄の「行狀」に從えば，經學・史學を學んだことになる。この影響は後になって梅村が史家としての自覺を持ち續けるという形で殘留していくことになる。それ以外の文學的側面に關しては，梅村のこの時期の作品が殘っていない以上明確ではないが，雰圍氣から影響をうけはしたものの，まだ本格

的な創作活動を開始するには至っていなかったのではないかと思われる。『焚餘補筆』[32]にいう梅村が及第した當時まだ詩をつくることができず，張溥に代作させていたという逸話は，もとより信ずるに足らぬものではあるが，かかる逸話を生むに足るだけの素地は，やはり梅村の側にもあったとみるべきであろう。梅村が「太倉十子詩序」[33]で說くところは，當時の狀況を大變よく示している。

兩王既沒，雅道澌滅。吾黨出，相率通經學古爲高，然或不屑屑於聲律。

兩王(世貞・錫爵)がなくなると，(太倉では)風雅の道は亡んでしまった。そのあと我我の一黨が出て，ともどもに經に通じ古を學ぶことを尊んだが，詩歌の道にせっせと勵む氣にはならない者もいた。

一般に詩を學ぶ雰圍氣は稀薄であったという。確かに初期復社の文學的成就は，幾社に比すればはるかに劣り，淸に入って以後その舊メンバーが不滅の業績を殘すに至る狀況には全く似ない。

そうした制擧の學，經學において梅村はぬきんでた實力を示し，復社十哲の一人とされた。十哲とは，諸書により異同はあるものの，杜登春によれば吳偉業・孫以敬・許煥・穆雲桂・周肇・吳國傑・金達盛・張源・張濬・張王治であるという。[34]さきの五人の中三人がこの中に含まれ，更にここで名の出る周肇・張王治(張溥の末弟)は，梅村が母の一族である朱明鎬及び例の五人とあわせて「わが黨の友朋」[35]とよぶ無二の親友であった。つまり復社十哲は梅村の友人たちをその主要メンバーとしており，この當時の復社がまだ地域レベルの小集團であったことがここからも明らかである。この集團を巨大な政治結社へと一變させるための手品の種として使われたのが，他ならぬ吳梅村であった。

三

前節では吳梅村の幼少期の環境について，特に復社との關係を中心として，やや詳細にみてきた。もとより本稿が梅村の傳記をつづることを目的とするものではない以上，これ以上年代を追って彼の經歷について考えることはやめ，ポイントのみをおさえることによって彼の文學と人生をう

かびあがらせてみたい。

吳梅村は明末の政界に巨大な影響力をふるった復社の一枚看板であり，後にはその殘黨の指導者ですらあった。しかるにかかる重要な地位にあったにもかかわらず，彼にはほとんど見るべき公的・政治的業績が無い。そのことは彼が經てきた官名からも明らかであろう。起家官が翰林院編修であることは，榜眼である以上當然のこととして，以下彼が歷任するのは，編修と兼任の形で實錄纂集官・東宮講讀官，ついで南京國子監司業・中允諭德・庶子，崇禎朝にあってはこれのみである。しかも最後の二つは，鄕里にあるままでの遙任の可能性が高い。(36) 弘光朝にあっては少詹事となるも二ヶ月にして朝を辭し，淸朝に入って順治十年，召されて就いたのは祕書院侍讀，ついで國子監祭酒，これのみである。要するにことごとくが文人學者にとっては名譽の官ではあるが，何ら政治的實權は伴わないものばかりなのである。そして事實彼はその役職にふさわしい行動しかしてはいない。

梅村の名が政治史の表面に大きく出るのはほんの數回にすぎない。しかもそのほとんどが梅村自身の主動的な意志に基づく行動ではなく，他者の影響もしくは壓迫に由來するものなのである。

その最初のものは，いうまでもなく崇禎四年辛未の科において會試第一名，殿試第二名——會元と榜眼の優等をもって及第したことである。この結果彼の名は全國津津浦浦にまで知れ渡り，復社は一氣にその勢力を增すことになる。無論受驗自體は彼の意志に基くものであったに違いないが，その背後には張溥の意圖が働き，優等で及第したについては周延儒の政治的判斷が大きな影響を與えていたこと，諸書に見える通りである。(37) つまり彼の優秀な成績による及第は，單に梅村個人のレベルを遠く離れた，高度に政治的な問題であったわけである。それゆえ結果が發表されるや，たちまち溫體仁・薛國觀の黨がこれを口實に周延儒を攻擊し，崇禎帝自身の判斷が下るまでその混亂は收まることがない。こうして梅村は，自らの意志とは關わりなく，否應なしに醜惡な黨爭の中へとまきこまれていくことになる。梅村は，張溥にとっては受驗團體復社の優等卒業生として

恰好の宣傳材料であり，周延儒にとっては復社と手を結ぶための絶好の仲介材料であり，溫體仁にとっては周延儒を攻撃するための願ってもない口實であり，つまるところ三者いずれにとっても彼は人格をもつ人間ではなく，單なる道具であるにすぎない。そしてこれ以降も梅村は政界にあっては道具でありつづけるのである。

梅村の悲劇はこの及第から始まった。それゆえ彼は死に至るまでこの及第を悔いてやまず，それが彼の文の隨處に認められる「虛名」に對する憎惡と科擧制度への批判という形で現われることとなる。例えば「德藻稿序」[38]にはこういう。

> 不意遽爲主司所收，而世人遂謬許而過採之，以其言爲該貫，夫學力深淺，內自驗之吾心，余兩人之於文，實未有所得也。……雖然，吾之致力於應擧，一二年耳。至今山陬窮邑，知吾名字，尙以制科之時文。吾爲詩古文詞二十年矣。而閭巷之小生，以氣排之，而詆吾空言爲無用。蓋天下之士止知制義之可貴，而不思古學之當復，其爲日世久矣。

思いがけなくも試驗に及第し，世人は我我の言葉を學に通じたものと勘違いしてしまった。だが學力の深淺について自分の胸にきいてみれば，我我二人（梅村と吳繼善）の學問は，實はまだ大したことはなかったのである。……しかし，私が受驗のため力を入れて勉强したのはほんの一、二年にすぎない。しかるに今もってとんでもない僻地の人間でも私の名を知っているのは，依然として受驗のための時文ゆえのことである。私は詩や古文を業とすること二十年になる。しかるに民間のつまらぬ書生どもは强くこれを排し，空言をのべて無用のことをなすやからと私のことをそしるのだ。思うに天下の士が受驗の貴ぶべきことのみを知り，古學の復すべきを知らぬこと，すでに久しいものがあるのである。

生涯が後悔の連續であった梅村にとって，この本來榮光たるべき榜眼及第は，その最初にしてすべての根源をなす悔いの種であった。

こういう經過で官に就いた以上，以後彼は否應なしに黨

爭の渦にまきこまれていくことになる。崇禎朝における彼の行動の中歴史の表面に現われたものは，黨爭とは關係の薄い二件――宋琬の兄宋玫とともに湖廣鄉試の考官となったこと，河南に封藩に赴いたこと――を別とすれば，蔡奕琛・張至發の彈劾，黄道周の助命運動という三事につきるであろう。蔡奕琛の彈劾は，及第後すぐになされた。この時の彼の行動ほどその性格を如實に反映するものはない。陸世儀の『復社紀略』によると，この時張溥は自ら溫體仁を彈劾する疏をつくり，吳偉業に命じてこれを提出させようとしたが，吳偉業は「朝に立つこといまだ久しからず，朝局にいまだ練せず」，しかしながら「師命を拒み難く」，やむなく疏の內容に手を加えて，溫體仁の黨人蔡奕琛を彈劾したのだという。ここでもやはり梅村は張溥の道具にすぎなかった。

ついで崇禎十年，梅村は溫體仁の後繼者張至發を彈劾し，「奏は寢して行なわれずといえども，その黨皆目を側つ」という。(39) この折周延儒・張溥ラインからの働きかけがあったかは定かではないが，この行動は翌年の田惟嘉・史堃に對する彈劾とともに，同年及第の楊士聰・楊廷麟らによる張至發・楊嗣昌に對する政治鬪爭の一環としてなされたものであり，彼らがいずれも辛未の科の出身である以上，座師周延儒と全く無關係にとられた行動ではないであろう。そして文秉の『烈皇小識』に見えるこの當時の朝事の記錄を通見するに，この鬪爭の過程で主動的に動いているのは右の兩楊であって，梅村はこの彈劾を除けば全くの脇役に終始している。つまり今回も友人たちの尻押しによってはじめてとられた行動であったわけである。この後史堃の反擊により，彼も一時危險な立場に立ちはするものの，結局堃の病死により救われ，楊廷麟が楊嗣昌によって最前線の盧象昇のもとへ派遣されたような，あるいはほぼ時を同じくして錢謙益・瞿式耜が投獄されたような，生命の危機に遭遇するには至っていない。

その後南京國子監司業の地位にあったとき，黄道周が廷杖をうけるという事態が生ずる。梅村は北京にあった折，楊廷麟とともに黄道周について易を學んだことがあり，(40) いわば師弟關係にあった上に，對張至發鬪爭においても同志

であった關係上，何とかこれを救おうとした。この折彼がとった手段は，まことに梅村らしいものであった。彼は自ら上書することはせず，監生涂仲吉を都にやって上書させたのである。この行爲はかえって崇禎帝の怒りに油を注ぐ結果となり，涂仲吉は詔獄に下され，杖された上に辰州に流されるが，梅村は免れる。梅村自身に言わせると，「嚴旨もて主使せる者を問い，吾その必ず及ばんことを知るも，既にして與るもの七人，而して吾は免るるを得たり」[41]とあたかも自らが正義のため多大な危險を犯したかの如き言辭を弄しているが，涂仲吉が悲慘な罰を與えられた背後で，使嗾者たる彼が涼しい顔をしていたという事實はおおうべくもない。しかもこの前後，元來無かったのか，後に災いを恐れて破棄したのか，梅村の集中に涂仲吉に贈った詩文は一篇たりとも存しないのである。これは，當時かろうじて死を免れたばかりの錢謙益が，涂仲吉の辰州への出發に際してその母を慰めるために「涂母王夫人五十序」[42]を書き，更に「送涂德公秀才戍辰州兼簡石齋館丈」[43]を贈っているのとはまことに對照的といわざるをえない。

弘光朝においては，吳梅村は出仕するにはしたものの，すぐに身を引いている。その間の事情については，彼の「吳母徐太夫人七十序」[44]に次のようにいう。

先皇帝時，余於大僚曾有所彈劾。幼洪所持浙獄，即其人也。……聞幼洪之及也，余自知不免。……

先帝（崇禎帝）の折，私は大官を彈劾したことがあった。幼洪（吳适）がかつて裁いた浙江の獄もこの人物に關わるものであった。……幼洪が逮捕されたと聞いて，私もたすかるまいと悟った。……

つまり梅村は蔡奕琛が起用されたことを恐れて逃れたもののようである。この官にあった間，彼には何一つ言うべき業績はない。

次に彼の名が歷史の表面に現われるのは順治十年，蘇州虎丘における同聲社・愼交社によるいわゆる十郡大社の會と，それにつづく上京・任官である。この復社再興をめざした大社の會は梅村を宗主としたものではあるが，彼自身が主體的に進めたものかどうかは定かではない。王昊・郁禾・周肇といった梅村と親しい人人が兩社の間をとりもっ

たという程穆衡の言からみて，[45] 彼ら太倉の舊復社の中心メンバーが，同聲・愼交兩社を和合させるため，復社の首腦の生き殘りである吳梅村をかつぎだしたのが眞相ではなかろうか。

これに續く清朝への出仕の問題は，梅村の經歷中最大のポイントとしてしばしば議論を呼んできたものである。まずこの出仕が梅村の意に反したものであったことは間違いあるまい。林時對『荷牐叢談』には次のようにいう。

吳偉業辛未會元榜眼，薄有才名，詩詞佳甚。然與人言，如夢語囈語，多不可了。余久知其謎心。鼎革後，投入土撫國寶幕，執贄爲門生，受其題薦，復入詞林。未有子，多攜姬妾以往。滿人訶知，以拜謁爲名，直造內室，恣意宣淫，受辱不堪，告假而歸。又以錢糧奏銷一案，褫職，慚憤而死。所謂身名交敗，非耶。

吳偉業は辛未の試の會元・榜眼，多少才名があり，詩詞になかなかすぐれていた。しかし人と語るときは寢言を言っているようで，理解不能のことが多かった。私にはずっと以前から彼が己れの心を隱していることがわかっていたのである。清朝に入ってから，彼は巡撫土國寶の幕下に身を投じ，禮を整えて門生となって，その推薦により再び翰林院に入った。まだ子がいなかったので，妾を大勢つれていったが，滿人はこれを知ると，あいさつに事寄せてそのまま奧に入り，淫亂をほしいままにしたので，吳偉業はこの屈辱に堪えかね，休暇を申請して歸鄉した。その上奏銷案にかかって職をうばわれ，恥と憤りのあまり死んだ，これこそいわゆる身名ともに敗るというものではあるまいか。

これはおそらく誣言であろう。梅村が日頃言語不明瞭であったというあたり，彼の行跡からしてさもありなんと思われ，あるいは一面の眞理を含むかもしれないが，出仕を自ら求めたということは考えにくい。梅村が土國寶とある種の關係を結んでいたのは事實だが，土國寶は順治八年に自殺しており，ここで梅村を推薦したのは兩江總督馬國柱と「在京諸公」であった。また梅村自身にとってもこの出仕が意に染まぬものであったことは，その「辭薦揭」[46]「上馬制府書」「答黃總戎書」[47] にみえる通りであり，これら一連

の手紙からは，梅村が病弱を理由に出仕を斷わろうとしながら，ずるずると狀況に流されていくさまをはっきりと讀みとることができるのである。そして當時彼の書いた文章の中で，こうした彼の感情が最もはっきりと示されているのは，その母の一門であり，自らの親友でもあった朱明鎬の墓誌銘であろう。[48]

朱明鎬はこの前年，順治九年に歿している。この文はおそらくそれから間もなく書かれたものであろう。その文中で梅村は朱明鎬の經歷をのべた後，彼が勅命をもって召されたにもかかわらず「死を以て自ら守り」，應じなかったことを記し，ついでこういう。

君歿未兩月，余之困苦迺百倍於君。君平昔所以憂余者，至今日始驗。憤懣不自聊，乃致殷憂之疾。其不與君同游者幾何而猶執筆以誌君之墓。嗚呼，君既死，誰復有知余者乎。不覺噭然以哭。

君がなくなって二月にもならぬのに，私は君に百倍する困苦にみまわれることとなった。君が私について心配していたことが現實となったのだ。怒りの思いにかられて心は休まらず，憂いの病に倒れるに至った。君とともにすごすことができなくなっていくらもたたないというのに，もう私は筆をとって君の墓のために墓誌をかいている。ああ，君が死んでしまった今となっては，もはや私を知ってくれる者はいまい。おぼえず號泣する次第である。

これは梅村の文集中最も激しい表現を用いた部分であろう。明言してはいないが，文中何をいおうとしているかは，自ら明らかである。この一文のみで，梅村の心事を明らかにするに足りるものと思われる。

では何故に梅村は出仕を强制されねばならなかったのか。當時の朝廷における諸勢力の對立關係は甚だ複雜怪奇であり，いまだ分明ならざる點が多いが，ともあれその中に滿漢二派閥があり，更に漢人の中に南北二派あったことは，既に定論のあるところである。從來の說では南黨——陳名夏・陳之遴ら東林・復社の系統をひく人人——が，北黨——馮銓・劉正宗ら魏忠賢・溫體仁・馬士英の系統をひく人人——に對して自派の立場を强化するために，東南士大

夫の偶像であった梅村に出仕を強要したというものであった。しかし『貳臣傳』中の陳名夏・馮銓らの傳にみえる記述からすると，實態はやや異なっていたようである。馮銓の傳にはいう。

是年御史張煊疏劾尙書陳名夏十大罪，有依附邪黨一款，謂當吳達等廷糾馮銓時，名夏時爲侍郎，徇庇私交，噤無一語。銓臥病，名夏屢爲候視。……

この年（順治八年）御史張煊が尙書陳名夏の十大罪をあげてこれを彈劾したが，その中に「邪黨に依附す」の一條があった。曰く，吳達が朝廷で馮銓を糾彈した折，名夏は當時侍郎の身でありながら，友人をかばって，一語も發しなかった。銓が病んだ折，名夏はしばしば見舞いに行った。……

更にいう。

十一年正月，與大學士陳名夏、成克鞏、張端、呂宮合疏薦擧原任少詹事王崇簡，……可擢任，前明翰林楊廷鑑、宋之繩、吳偉業，……可補用。又言編脩張天植乃順治六年一甲三名及第，例不外任，仍宜留。……三月大學士寧完我劾陳名夏，結黨攬權諸罪以既定，張天植外轉，復與馮銓等保留翰林，營私巧計莫可端倪一款。……

十一年正月，（馮銓は）大學士陳名夏・成克鞏・張端・呂宮と連名でもと少詹事王崇簡……（以下五名）らは昇進せしめ，明の翰林楊廷鑑・宋之繩・吳偉業……（以下三名）はめしだされるがよろしかろうと推擧し，また編修張天植は順治六年の科の一甲三名及第ゆえ，外任にあつるべからず，このまま都に留められますよう言上した。……三月，大學士寧完我（筆者注、早くに旗籍に入った漢人）が陳名夏を彈劾し，その黨を結び權力をにぎる罪が定まったが，その中に張天植が外任にあてられたにもかかわらず，また馮銓らとともにこれを翰林にとどめた，その私益をはからんとする巧計，端倪すべからざるものあり，の一條があった。

つまり北黨の馮銓も梅村の推薦者に名を列ねており，彼と陳名夏はしばしば一黨として扱われているのである。無論馮銓が北人重視の政策をとり，また龔鼎孳としばしば激し

く對立したことは周知の通りであり，また劉正宗が南人を敵視し，陳名夏の斷罪にあたって積極的な役割を果たしたことは事實であるが，しかし南人と北人は必ずしも常に對立していたわけではなく，おそらく當時の政局にあっては漢人相互の對立を內包しつつも，全體としてはむしろ團結して滿人と政治鬪爭を進める情勢にあったのではなかろうか。では彼らの目的とするところは何であったのか。それは陳名夏傳に見える次の事實が明瞭に示していよう。

名夏辯諸款皆虛，惟留髮復衣冠所言屬實。

名夏は辯明して諸諸の罪狀ことごとく身に覺えはないが，ただ髮を留め衣を復すという一條のみは事實である，といった。

「留髮復衣」が何を意味するかはいうまでもない。おそらくおのれの命運が極まったことを悟った陳名夏は，最後の最後に至って自らが李自成に屈し，滿洲に屈し，あらゆる汚辱を身に受けながら守ろうとしたものを世に示したかったのであろう。

梅村はこの體制內部におけるレジスタンスに加擔するため召し出されたのである。その目的とするところの一つは，おそらく「貳臣」，更には李自成にも仕えたいわば「參臣」——陳名夏・金之俊・龔鼎孳・梁清標らこのグループの中心メンバーはいずれも李自成にも仕えた——と結ぶことをおのれの誇りにかけて潔しとしない東南の士大夫たちを味方にすることだったであろう。この時ともに推擧された王崇簡らも顧炎武ら遺民中の最重要分子と親しい關係にある東南に顏のきく人人であることも，この推測を裏づけるものであろう。梅村が特に選ばれたのは，その名望に加えて陳名夏とは友人，陳之遴とは娘をその息子に嫁がせた間柄であったという個人的事情によること，いうまでもない。もとよりこれは政治的意欲も能力ももたない梅村にとっては，ただ迷惑なだけであったに違いない。しかし彼はまたしても流されていく。ここでも梅村は斷わりつつも斷わりきれず，結局兩親に迫られて「老人の意を傷つけ難し」[49]という口實で都にのぼるのである。そして彼が都に入ったのと相前後して陳名夏は處刑され，陳之遴も失脚し，その出仕の目的の一つは早くも失われてしまったのであった。

しかし彼の出仕にはおそらくもう一つの目的が隱されていた。それを示唆するのは，彼の北京における生活――特にその宮仕えの様子である。彼の北京における生活については，幸いなことに恰好の資料が殘されている。談遷の『北游錄』である。

談遷は『國榷』の著をもって知られる歴史家であり，順治十年から十三年にかけて資料收集のため北京に赴いた。その際つけられた詳細な日記が『北游錄』である。彼が北京で最も親密に交際した人物は，ほかならぬ吳梅村であった。梅村は，この自分より年長の不遇の人物，歴史家にして文學においてはコチコチの復古主義者であった談遷を深く愛したようである。「吳六益詩序」[50]にはいう，自分が都にいる三年の間に訪ねてきたものは多かったが，取るべきものは「史においては談孺木，詩においては吳六益（懋謙）のみ」であった，と。談遷在京中の兩者の親密さは尋常ではなく，『北游錄』中梅村の家を訪問した旨の記載は實に四十七回の多きに及んでいる。そしてそこからは，他の資料からは知りえない梅村の私生活が，かなりの程度までうかがいうるのである。例えば彼が下戸であったこと，議論好きであったこと，この時期もやはり病氣がちであったこと，病の折には詩や繪で氣をまぎらせていたこと，彼の屋敷が周肇・黄與堅・王撰・彭賓・張宸ら，太倉とその近邊の町から都に出て來た人人の常宿兼聯絡所として利用されていたこと等が，この日記の記述から明らかとなる。

その公的生活に關する記述としては，まず順治十一年十月十七日の項に「時に侍讀に除せらる」といい，順治十二年二月十五日の項に正月の末南苑に召されて『內政輯要』を纂修し，二月八日病ゆえに歸されたという記事が見えるのがまずあげられよう。この折順治帝とはじめて親しく言葉をかわしたのであろうか，官歴と家族について詳しく問われて，弟は生員である旨答えたところ，順治帝が「生猿」――なれていない猿――とひっかけて駄洒落をとばしたという。年少の順治帝らしい逸話であるが，同時に帝が梅村に親しみを感じていたことを示すものでもあろう。もとより侍讀は側近の官である。更に同年十二月八日の條には宮中から梅村に繪を描いて進上するよう命が降ったこと

をいう。これらの記事と，梅村が上命によりつくった何首かの詩，及び『光緒嘉定縣志』に見える梅村が順治帝の御前で自作の戲曲『秣陵春』を上演したという記事[51]を重ねあわせると，彼が召し出されたもう一つの理由が浮かびあがってくる。詩文はもとより，書畫演劇等あらゆる方面にすぐれた才能をもつ一流の文化人であった吳梅村は，本來中國文化志向の强かった順治帝を，より一層漢化させるための重要な役割をになう存在だったのである。この試みはかなりの成功をみたといえよう。梅村は充分な寵愛をうけたらしく，歸鄉にあたっては「上みずから丸藥を賜う」という[52]。そして順治帝はその遺詔で――もとより帝の自作ではあるまいが――その罪の第一として漢俗に習ったことをあげるに至っているのである。

北京在任中の梅村が，おそらくかかる政治的意圖を抱いて順治帝に近侍するに至ったについては，彼の北京における友人達の力がその背後に働いていたとみるべきであろう。龔鼎孳・梁清標の如きはその最たるものである。梅村は，龔鼎孳とはかつて湖廣の試の考官となった折同考官として交際をはじめて以來の舊友であり，[53]梁清標の父梁惟樞は北人であるが，幼少から趙南星の薫陶をうけた生え抜きの東林黨として梅村と舊交あり，つまりいずれも古いつきあいの友人であった。[54]彼らはいずれもかつて李自成に屈し，今また清朝の官吏となり，名節の點では激しく非難をされても致し方のない人人ではあったが，しかし清朝官界にあっては，かつて生命惜しさに流賊の前に膝を屈したはずの彼らは，實に漢人の利益を守るために生命を賭して戰う最も果敢な鬪士だったのである。特に龔鼎孳の如きは，漢人の權利を主張したために再三にわたって官位を降され，生命の危險にすら瀕したにもかかわらず，何らためらうことなく自らの立場を主張しつづけ，あの奏銷案の害を最小限にくいとめえたについても，彼の力によるところが大きかったといわれる。[55]更には彼らには江南の抵抗運動とある種の關係をもっていた形跡さえみとめられる。錢謙益が黃毓祺の獄に連座したとき，これを救ったのはおそらく梁清標であった。[56]また龔鼎孳が江南の遺民をしばしば救ったことは，『清詩紀事初編』にも說く通りである。つまり彼らは

體制内からの抵抗派であり，その功績は遺民たちが奔走してかちとったものに數倍するといわざるをえない。しかし後世からは，常に變節者の名をもって呼ばれ，あらゆる惡罵をなげかけられることになるのである。

梅村は彼らと一種の文學グループを形成して，交際していたようである。彼の行動が何らかの政治的意味をもつとすれば，それにはこのグループの影響があずかって力があったとみるべきかもしれない。梅村本人は，例によって政治的言動を表だった形ではおこなわず，在京時代の詩作品の大半は贈答の作で占められ，その多くは――特にあまり親しくない人間におくった作は――大變生氣に乏しい，型にはまった詩である。[57] また，かつて一度在住した經驗があるにもかかわらず，やはり北方の風土は彼にはなじみ難いものだったようであり，早くも上京途上「阻雪」[58]で

十丈黄塵千尺雪　十丈の高さにまう黄色い砂ぼこり
と千尺の高みからふる雪
可知俱不似江南　どちらも江南とは大違い

とうたっている。結局梅村は繼母の死を口實に，この意に滿たない北京生活を二年半でうちきって歸鄉することになる。

結局梅村が公的地位にあった期間は極めて短く，鳴り物入りで登場した割には，その政治的業績はほとんど皆無といってよい。彼が官にあった期間は，明朝では彼が「辭薦揭」[59]でいうように「辛未通籍より後，京にあることただ四載」――つまり中允諭德・庶子の位は鄉里にいるまま遙任されたものであろう[60]――，清代にあってもわずか二年半にすぎない。これは主として彼の性格が全く政治に不向きであったことによるものであろう。彼の公的生活は，そのほとんどが他の人物によって翻弄されるうちにおわったのである。

四

次に彼の私生活に考察を加えることにより，その文學の特質を探究してみたい。右に述べたように，彼の在京生活は全部あわせても六年餘にすぎず，それ以外の五十數年間はほとんど江南――それも太倉ですごされたことになる。

梅村の詩集から推測される彼の行動範圍は，大變限られたものである。旅行といえるほどの旅行は，二度にわたる出仕のための北京行と，崇禎年間湖廣の試及び河南封藩のための二度の公務旅行のみであり，それ以外の時期はほとんど蘇州府・松江府の範圍を出ることはなく，太倉から出るにしてもせいぜい一日行程の距離にある常熟・松江・蘇州といった近隣諸都市を訪問するにすぎない。あとは遠くても嘉興・杭州どまりである。長期滯在した土地としては，北京を除けば國子監司業をつとめていた南京があるが，これも一年に滿たない期間のことである。

つまり彼は，古くは李白・杜甫，後には王士禎・黄景仁の如く，旅をしつつ各地で詩をつくった詩人ではなく，江南のごく狹い地域でのみ活動した人物であり，その詩にあらわれる自然は，都にのぼる際の一部の例外を除けば，ことごとくが江南の溫潤で小さくまとまった自然であるはずであり，その他の地區についてうたう場合は，想像もしくは繪畫によっているのである。畫家でもあった彼には，自然をも繪畫的にとらえようとする傾向がある。彼が最も愛したのが，東西の兩洞庭山——太湖の中につきだした，山あり水あり洞窟ありの箱庭的風景——であったことは，甚だ象徵的であるといえよう。

彼の私生活における最大の問題點は，彼が何によって生計をたてていたかということである。元來彼の家には資產がなかったことは，さきにみた通りである。常識的には在官中にためた金で田地でも買いこんだとみるべきところであろうが，彼が官についていた期間は短く，しかもその歷任した地位はいずれも名譽のみ高く實益を伴わない清職であって，さしたる收入があったとも思えない。後に奏銷案の標的となった點から考えても，彼の經濟狀況がそれほど豐かなものではなかったことは見當がつくが，しかし生活に窮するほどではなかったことも，その詩文に何らその種の記述がないことからして明らかであり，むしろ彼は柳敬亭・周弘叔のために募金をつのることさえしている(61)（無論このことは同時に彼が獨力では救濟できなかったことを意味するものでもあるが）。彼の生活資金源は何であったのか。

結局のところ，その收入源として唯一想定しうるのは賣

文である。彼の晩年の交際相手に富人・大官が多いことは，その點極めて示唆的であるといえよう。その「許節母翁太孺人墓誌銘」[62]にはこういう。

孺人性好施，扶困濟厄。……初吾師西銘以社事興起東南，……當是時孺人方持家秉德，先揮斥千餘金以爲頓舍飲食之費。孺人無幾微吝色。

孺人は施しを好み，困っているものを救われた。……わが師西銘先生が東南の地に社事をおこされた折……この時孺人は德により家產をとりしきっておられたが，千餘金をはたいて，（復社大會の）宿舍飲食の費にあてられた。その折孺人は少しも物おしみする樣子を見せなかった。

つまりこの墓誌銘は復社のパトロンであった婦人のために書かれたわけであるが，梅村がこの文を書くことをひきうけたのは，おそらくその息子が梅村に對しても「吝色」を示さなかったからであろう。この種の記述は彼が書いた墓誌銘・壽序の類には隨所に見出される。それらの文には，常に故人がいかに施しを好み善行を行なったかが大書されているが，つまりはこれも大枚の施しを受けたがゆえの美辭であろう。また彼の集中に，江南巡撫韓世琦・江南總兵都督梁化鳳から太倉の知州白登明に至るまで，この地域の清朝官人たちにおくった詩文が多く殘っていることも，別の意圖を含みつつも，一つには經濟的援助を得んがためのものであったのではなかろうか。吳興祚に同族と稱して近づいているのも[63]，文人好みのこの旗人からの金錢を期待してのことではないかと思われる。したがって，彼の作品中かかる目的のために書かれた作品と，自發的な作品——歌行の多くや自述的なもの，親友・身內におくった作——は區別して考える必要があろう。

しかし彼のこうした清朝官人との交際が，生活の資をうることのみを目的としていたとみなすことは，彼に對してあまりにも不當であろう。そこには今一つの目的——私人としての公的活動とでも稱すべきものが存在するのではなかろうか。

順治十四年朝より退いて後，太倉で暮らしていた間，清朝の政府當局は決して彼を放置していたわけではない。江

南黨社運動の領袖であった梅村は，本人の意志の如何にかかわらず抗清運動の要となりうる可能性を宿命的にもっており，それゆえ清朝にとっては警戒すべき人物であった。したがって江南における知識人彈壓は，彼にも直接・間接に關わってくることになる。例えば二度にわたる科場案においては，彼と親しかった吳兆騫・陸慶會が流罪に處せられるに至り，梅村は彼らのために「悲歌」「吾谷行」[64]をつくり，特に前者は深く人口に膾炙した結果，かえって彼の詩ゆえに科場案と吳兆騫の名が世に傳えられる結果となっている。[65] そうした江南の多くの疑獄事件中，梅村自身と直接に關係し，江南の士大夫全體を恐慌狀態に陷れたのは，奏銷案であった。

奏銷案とは，順治十八年から康熙元年にかけて，順治帝の死去に伴う混亂期に，江南巡撫朱國治が中心となって江南の士大夫を稅の未收の名のもとに除籍・拘引しようとした事件である。梅村はこの時主たる標的の一つであった。『研堂見聞雜錄』にいう。

乃撫臣更立奏銷法，歲終，將紳衿所缺，造册申朝。……蘇松常鎭四郡幷溧陽一縣，紳士共得三千七百人。……吾州在籍諸紳，如吳梅邨、王端士、吳寧周、黃庭表、浦聖卿、曹祖來、吳元祐、王子彥，俱擬提解刑部，其餘不能悉記。……

そこで巡撫（朱國治）は更に奏銷法を立て，年の暮れに，士大夫が未納のままにしている稅について上奏した。……蘇州・松江・常州・鎭江四郡と溧陽縣とでこれにかかった士大夫はその數三千七百人。……わが太倉州の官籍にある諸人，吳梅村・王端士・吳寧周・黃庭表・浦聖卿・曹祖來・吳元祐・王子彥はすべて刑部まで護送されることとなった。その他すべてを記錄しつくすことはできない。

結局，龔鼎孳らの努力により，康熙元年朱國治は解任され，梅村も刑部に連行されることは免れたが，おそらく彼はこの時點で除籍せられ，再び官に就かされるおそれはなくなったものと思われる。「與子暻疏」に「奏銷はわが素願に適う」というのは，このことをさしているのであろう。とはいえ「ほとんど家を破らんとするに至」った以上，天性

怯懦な梅村が恐怖にふるえたであろうことは想像に難くない。しかも彼の友人知己でこの災いにかかったものは數知れず，さきに『研堂見聞雜錄』に名のみえた人人のうち，王端士卽ち王揆は王時敏の第二子にして，次の黃庭表卽ち黃與堅とともに太倉十子の一人であり，王子彥卽ち王瑞國は彼の娘の嫁ぎ先であった。それ以外にも，やはり太倉十子のメンバーであった王昊は，『研堂見聞雜錄』によれば，北京まで實際に連行された數少ない人間の一人であり，梅村は彼を送るため「送王惟夏以牽染北行」と題する四首の五言律詩をつくっている。(66) 更に，やはり十子の一人で梅村最愛の弟子であった顧湄や，親密な關係にあった松江の董含・董俞兄弟等も皆この案に坐して仕官に望みを斷った人人であった。

こうした狀況におかれた時，彼は自分自身と江南の士大夫全體の利益を守るために，清朝當局者に接近する必要があったのである。朱國治が解任された後，かわって江南巡撫となった韓世琦に梅村は接近を圖る。彼が韓世琦のために書いた「江南巡撫韓公奏議序」(67)「講德書院記」(68)の二篇からは，梅村のそうした意圖がはっきりとくみとれるのである。前者にはいう。

顧以東南區區一隅，賦稅居天下之半。……吳民戶賦而口斂，……郡邑守相，日有要，月有成，趨辦不及，卽鎚譙隨之發代者，拜除如流。……公能無焦心極慮，以求當世之長策耶。……若夫定經賦，實民力爲根本，以兼爲東南，此萬世之謀，不易之論。……

區區たる東南の一隅が，賦稅においては天下の半ばを占めているのだ。……吳の民は戶ごと，人ごとに稅をしぼりとられ，……郡邑の長は日ごと月ごとに稅額をそろえることを要求され，その要求に追いつくことができなければ，たちまち譴責されて續いて代りの者が派遣され，次から次へと任命されるはしから免職されるという有樣。……(韓世琦) 公は焦燥しつつ懸命に思いをめぐらしてすぐれた策を求めずにおられようか。……通常の稅を定めるには，民力を充實させるのが根本である。これを東南全體に及ぼす，これこそは萬世の策，不易の論である。……

ここで述べられているのは，韓世琦に對する稱讃と，それと相表裏する要求である。

これより先，順治十七年に鄭成功が長江に突入し，鎭江を陷して南京に迫るという大事が生じていた。この事件に錢謙益が關係し，鄭氏一統と聯絡をとりつつ松江總督馬逢知に寢返り工作を施していたことはほぼ確實であるが，[69] 梅村にはこの時をも含めて，抵抗運動と關係した形跡はない。この時のことについて，杜登春は『社事始末』で次のようにいう。

江上之得免者，賴主盟者在朝列。惟梅村憂居，巋然靈光，爭相推重。梅村亦以身自任合局計，幸素不講海南事，兩社得以屛息偸生，無及於難。……

江上案から愼交・同聲兩社が免れることができたのは，中心人物が朝官となっていたからである。ただ梅村だけは喪に服して鄕里におり，唯一人殘る存在であったので，兩社は爭って彼を重んじた。梅村も自ら社事統一の計をなすものと自任していた。幸いにして普段から海南のことを論じていなかったので，兩社はともに何とか生きのびることができ，難にあわずにすんだのである。

梅村は「素(もとよ)り海南の事を論ぜざる」人物であった。これは一つには鄭成功が侵入した場合，太倉は鄭氏と清と雙方の掠奪の對象となる恐れがあったためであろう。そして梅村の交際範圍には危險な反清分子はほとんどおらず，皆貳臣・清臣もしくは穩健な遺民ばかりである。わずかに錢謙益・歸莊・紀映鐘・杜濬らとの交渉と，松江で陳子龍・徐孚遠の子と會っていることが彼と抵抗運動を結びつけうる可能性をも暗示するが，少なくとも現在殘されている詩文からみるかぎり，彼は清朝の從順なる臣民であったように思われる。

しかしそうした彼でさえも，やはり社事の中心人物ということで告發は免れがたく，陸鑾により，鄭成功と聯絡をとって社事をおこし，世を騷がそうとしたという理由で訴えられるが，これは「諸君子營救の力」[70] のおかげで救われる。[71] 彼が日頃から重ねてきた保身のための努力が實を結んだといってよかろう。こうしたことを豫見してか，梅村は

前記の韓世琦以外にも，この地の軍事の最高責任者である梁化鳳にも接近している。梁化鳳は入江の役で鄭成功をうちやぶった功勞者であり，明の復興を圖るグループにとっては不俱戴天の敵であるはずだが，梅村はこの人物に異常なまでに媚びている。彼の文集中最大の文は梁化鳳のために書かれた「梁宮保壯猷記」[72]であり，その他にも「江海膚功詩序」[73]「崇明平洋沙築海隄記」[74]はいずれもその功績を讃えるもの，「封夫人張氏墓誌銘」[75]はその母のために書いたものである。『研堂見聞雜錄』によると，梁化鳳の軍隊の紀律はあまりほめられたものではなく，太倉近邊で數數の蠻行をしているが，梅村がここまで梁化鳳に近づいたのは，自身をも含めた地域全體を，少しでも守ろうとする意圖からであろう。

この他にも彼は地域改善のために樣樣な努力をしていたようである。その最も顯著なあらわれは，出仕前のものであるが，「答土撫臺開劉河書」[76]であろう。土撫臺とは，さきにも名の出た土國寶のことである。土國寶は順治八年に自殺している以上，この手紙はそれ以前に書かれたものであろうが，ここで梅村は，泥でふさがってしまった劉河を開くための方策について，具體的な數字をあげながら，精緻かつ適確に論じている。この手紙は彼の意外な實務の才を示すものであり，同時にまた土國寶からの諮問に答えるという形をとっている以上，周圍からもそうした能力をもつものとみなされていたことを示していよう。この計畫は結局土國寶の失脚ゆえか，この時には實行されなかったが，順治十四年に至って知州白登明[77]により實現されることになる。

要するに太倉における梅村は，地域共同體並びに社事關係者の，極めて穩健なる代辯者であった。

一面でこうした必ずしも意に染まぬ交際をしつつも，彼は太倉で趣味豐かな生活をおくっていたようである。彼は「性山水の游を愛し，嘗て月を經て反(かえ)るを忘れ」たこともあり，また王世貞の子士騏の庭園を自分の趣味にあわせて改造してこれを「梅村」と名附け（彼の號はこれに由來する），「士友とその間に觴詠して終日倦む色無し」[78]という。無論彼は清遊のみしていたわけではなく，藝者遊びも隨分と好

んだようである。そもそも彼は崇禎年間南京で國子監司業の地位にあった人物である。明末の南京が比類なき歡樂の地であったことは，余懐の『板橋雜記』や『桃花扇』にみごとに描寫されている通りであって，當時の著名な文人はいずれも名妓と豔名を流したものであった。中でも侯方域と李香君は，『桃花扇』ゆえに廣く知られているが，當時名高かったのはむしろ冒襄と董小苑，龔鼎孳と顧眉生，そして秦淮の妓ではないが最も才女の名が高い柳如是と陳子龍・錢謙益，これらのカップルは，當代一流の才子佳人の組み合せとして，傳說的存在にすらなっていた。こうした環境に赴いた梅村は當時わずかに三十一歳，しかも詩文はもとより繪畫・音樂に至るまで，行くところ可ならざるはなき風流才子であり，わずか二十三歳にして榜眼となった令名高き復社の俊秀である。名士好みの妓女たちが，彼をすておくはずはなかった。ここで彼の色事修業の基礎は成立していたとみるべきであろう。

結局梅村と最も親密な關係に至ったのは卞賽賽——後の玉京道人であった。「過錦樹林玉京道人墓」[79]の序によると，兩人は蘇州の虎丘ではじめて出會い，卞玉京の側から梅村に言い寄ったが梅村はわざと意味のわからぬふりをしてこれを避け，その後も二人はともに思いを殘しつつついに結ばれることはなく，悲戀に終ったという，いとも美しいラブ・ロマンスとなっているが，現實問題としては，雙方の尋常ならざる執着ぶりからみて，兩人の間に全く關係がなかったとは信じがたい。明の滅亡を前に二人の關係は途絶えるが，その後の亡國の時期にも彼は別に禁欲していたわけではない。それどころか，男子がいないことを理由にせっせと子供をこしらえつづけ，結局できた子の數は十二人の多きに及んでいる。その中男子は三人，長男の暻は五十四にしてはじめて生まれたという以上，五十をすぎて少なくとも三人は子供をつくったことになる。その母の數は三人，つまり妾の數は二人以上，これらの數字は病弱な男にしては出來すぎといえよう。梅村はこの方面に關しては非常に精力的な人物であった。

一方卞玉京とは順治七年再會の機會が訪れる。この時のことは，さきの「過錦樹林玉京道人墓」序，「琴河感舊」

序,[80]『梅村詩話』卞玉京の項に詳しくみえるところであるが，場所は常熟，仲をとりもったのは他ならぬ錢謙益であった。あるいは柳如是が卞玉京と親しかったのかもしれない。錢謙益は梅村のために卞玉京を呼んだが，玉京は屋敷まで來ながら化粧にことよせて再會をひきのばし，結局急病と稱して會わずに歸った。この時梅村が詠んだのが有名な「琴河感舊」四首であり，錢謙益も後にこれに和している。この點については後に錢吳の關係について論ずるところで詳述することとしたい。その翌年の春，二人はついに再會する。卞玉京の方から梅村を訪ねてきたのである。『梅村詩話』によると，この時二人は「共に横塘に（舟に）載り，始めてさきの四詩（「琴河感舊」）を書して贈る」というところをみると，兩人の關係は復活したものとみえる。梅村が「聽女道士卞玉京彈琴歌」[81]をつくったのはこの時のことであろう。後に卞玉京は別人に嫁いだというが，やがて蘇州に歸ってきたところをみると，梅村との關係は終生繼續したのかもしれない。

梅村にとって最愛の愛人が卞玉京であったことは間違いないが，彼はその他の妓女にも著しい興味を示しており，その絶句の多くは彼女たちのためにつくられたものである。その相手は，あるいは卞玉京と名を齊しうした冦白門であり，[82]あるいは順治九年，嘉興で出會い，「最も明慧にして喜ぶべし」とて二度にわたり十二首もの七絶をおくった陸楚雲であり，[83]あるいは正體不明の朗圓なる妓女であった。[84]更に松江では張錫懌の愛人倩蜓と會って喜んだりもしている。[85]

更に，梅村は素人女ともある種の關係を結んでいた形跡がある。その最も興味深い事例は，「無題」[86]にみえるものであろう。この四首の七言律詩は，この題名の作品がしばしばそうであるように典型的な豔詩であるが，程穆衡の『箋注』にひく梅村の曾孫溺（實は吳繼善の曾孫だという）なる者の說には，次のようにいう。[87]

王先輩玉書麟來志云，虞山瞿氏有才女，歸錢生。生患瘵，女有才色，不安其室，意屬先生，扁舟過婁，投詩相訪。先生於稼軒乃執友，而受之禮尙又錢宗也。以義自持，因設飲河干，賦無題四章以謝之。瞿氏後歸石

學使仲生申，錢生猶在也。……

王先輩玉書麟（麟が諱）のご教示によると，常熟の瞿氏に才女があり，錢生に嫁いだ。ところが錢生は病身，女は才色兼備であったので，この妻の座におちつく氣になれず，先生に身をまかせようと考え，小舟に乘って太倉まで來ると，詩をおくって訪問した。先生は稼軒（瞿式耜）とは親友であり，[88] また禮部尙書受之（錢謙益）も錢氏一門の人間であったので，義によってその身を持すこととされ，河岸に宴の席を設けて，「無題」四首を賦して謝絶された。瞿氏は後に石學使仲生申（申が諱）にとついだが，この時錢生はまだ在世中であった。……

「瞿氏」と「錢生」が何者であるかは甚だ興味深いところである。まっさきに聯想されるのは，この文中にも出る瞿式耜と錢謙益であろう。事實錢謙益の息子孫愛は瞿式耜の娘と結婚し，しかも孫愛は甚だ凡庸な不肖の息子であったことを考えあわせると，「瞿氏」の「才女」は瞿式耜の娘に他ならないと考えたくなるが，この夫婦が離緣したという事實はない以上，後にいう瞿氏が石申と結ばれたという記事とは矛盾する。無論この話が根も葉もない全くの風聞である可能性も否定できないが，ただ錢謙益が何らかの形で關係していたことは，第三首に

畫裏綠楊堪贈別　畫中の綠の柳は別れのおくりもの
曲中紅豆是相思　曲中の紅豆は思いのたけをつたえるもの

とあることからしてもまず間違いあるまい。「綠楊」の句は柳如是の舊姓楊氏を暗示し，「紅豆」とは柳如是が錢謙益におくり，錢謙益がこれを詩に詠じたことで甚だ名高いものであり，一時錢謙益は「紅豆老人」と自稱していたことすらある。さきの文に梅村が錢謙益をはばかって瞿氏の申し出を謝絶したというのと考えあわせれば，この一聯の意味するところは明らかであろう。そして『吳詩集覽』にはこの第三首のあとに長大な缺字がある。『集覽』における缺字の多くが錢謙益にかかわるものであること，いうまでもない。おそらく錢謙益と關係のある女性が梅村にいいより，梅村が錢謙益への義理からこれを斷わったのは事實

なのであろう。ともあれこれもまた梅村の色男ぶりを物語るエピソードではある。

つまるところ梅村はかなりの女好きであり，世に抱かれている憂愁の詩人というイメージに甚だそぐわないことではあるが，享樂的な一面をもっていたと結論せざるをえない。また彼にこうした實生活における裏付けがなければ，その豔詩があれほどまでに高い成就を生みだすことはできなかったはずなのである。

五

次に梅村の趣味生活について考えてみたい。梅村の如き偉大なる趣味人においては，一口に趣味生活といっても簡單にかたづけることはできないが，趣味というより本業というべき詩作を別にすれば，その主たるものは書畫と演劇（音樂を含む）の二つであろう。まずその美術面における業績と地位から檢討してみたい。

梅村の繪畫作品が世に傳存しているか否かは詳かでない。（補注1）陳寅恪氏によれば，眞僞のほどは怪しいが，『江左三大家詩畫合卷』なる書物があり，梅村の繪に錢謙益が詩をかきこんでいるというが，[89] 筆者はいまだ目睹する機會がない。ただ，張庚の『畫徵錄』にも梅村の名がみえること，『北游錄』に順治帝から繪を召し出された旨のみえることは，彼が畫家としてかなりの名聲を有していたことの佐證となろう。

更に，彼の詩集にはおびただしい量の書畫にかかわる詩が收められている。「畫中九友歌」[90] の如きはその最も名高い作であろう。この九人の人人すべてと梅村が實際に交友があったか否かは定かではないものの，少なくとも王時敏・王鑑・楊文驄・程嘉燧・邵彌の五人とはかなり親密な交際があったことは，その文集から明らかである。[91] その他の四人にしても，李流芳は『秣陵春』の參訂者李宜之の叔父であり程嘉燧の親友である以上何らかの交際があったものと思われ，張學曾・卞文瑜の二人は九人の中では比較的知名度が劣る人物であるだけに梅村の友人であった可能性は高いといえよう。董其昌については何ともいえないが，彼と並稱された陳繼儒とは，二十餘のとき松江にあった陳氏の

山莊で會っている。[92]

つまり梅村は當代一流の畫家たちと親密な關係にあった。中でも特に親しかったのは，太倉を中心に活動していたいわゆる「四王吳惲」の一派——董其昌の後繼者たる王時敏・王鑑・王翬であった。彼らのモットーは模倣である。彼らは一意專心宋元の作風を模し，かぎりなく古人に近づくことをもってその生きがいとし，ついには生命力なき作風に陷るに至ったという。こうした彼らの理論から直接に聯想されるのは，あの前後七子の文學論であろう。兩者ともに，自らの奉ずる古典への徹底した模倣にその全精力を傾け，ついには獨創性を失うに至ったという點で，その歩んだ道は完全に軌を一にしている。繪畫における復古主義が文學における復古主義から百年ほどおくれて，かつて文學における復古主義の最後の根據地であった土地で發生したという事實は，前者が後者の影響下に成立したことを意味するものであろう。つまり梅村は美術においては純然たる復古派の中にあったわけである。ただ彼らの復古の目標が宋元であったこと，彼らが先達とあおぐ董其昌が文學的には公安派の同調者であったことは，彼の文學にむしろ復古派とは逆行する方向への影響を與えたとも考えられる。そして彼の畫家としての顔が時おりその文集の中でも時には題畫詩，時には繪畫的な詩という形であらわれること，先述の通りである。

次に梅村の戲曲・音樂方面における業績について考察してみたい。彼がこの分野に注いだ情熱と當時における名聲とは，ほとんど詩におけるそれに匹敵するほどのものであった。彼は三篇戲曲を殘している。四十一齣に及ぶ南戲の大作『秣陵春』と北曲の小品『臨春閣』『通天臺』である。この三篇については，すでに拙論「吳偉業の戲曲について」[93]で論じたので，ここで詳しくふれることはしないが，いずれも彼の詩と同樣，華麗な典故をちりばめた曲辭の中に彼の人格と經歷が强烈に投影された作品であり，構成面で缺陷を有することはおおいがたいが，その點を割引してもなお世に對して自らの存在價値を主張しうるだけのものをもっているように思われる。

彼の劇場作品で現存するのはこの三種のみであり，また

これ以外に作品があった形跡も認められないが，しかし彼の當時の劇壇における地位は，決して片手間仕事として芝居を書いてみるという趣味人の段階に留まるものではなかった。そのことは當時の最もすぐれた演劇關係の著作の多くに彼が關係していることからも明らかであろう。

明末清初という時代は，演劇においてもやはり過去の總括という性格をもつ時期であり，それゆえ曲學の集大成として相繼いで『南詞新譜』『北詞廣正譜』という南曲・北曲のすぐれた曲譜が出版されているが，梅村はその雙方にかなり深くかかわっている。『南詞新譜』は，吳江派の領袖沈璟の『南九宮十三調曲譜』にその甥沈自晉が手を加えて完成したものであり，崑山腔の最も完備した曲譜として重要な意味をもつものであった。この曲譜の冒頭にかかげられた「參閱姓氏」の中に梅村の名が認められるのである。無論こうした出版事業における參閱者・參訂者というものは，一般に單に名前を貸すのみで，直接にその書物の成立に關係していたかどうかは疑わしいのが世の常である。しかしこの場合，梅村の立場がそれ以上のものであったことにはほぼ疑問の餘地がない。その證左となるのが，「參閱姓氏」の中で彼の名のおかれている位置である。彼の名は九十五人中の三番目，しかも彼の前にいる二人とは卜世臣と馮夢龍，前者は王驥德が『曲律』卷四で「詞隱（沈璟）詞譜を作りてより，海內斐然として風に向う。衣鉢相承け，尺尺寸寸その矩矱を守る者は二人。曰くわが越の鬱藍生（呂天成），曰く檇李の大荒逋客（卜世臣）」といわれる人物であり，沈璟の劇作法を最も忠實に守った追隨者として知られ，後者はいうまでもなく俗文學界の大立物たると同時に，やはり吳江派の劇作家でもあり，かつ沈自晉の「凡例」によれば，『南詞新譜』は馮夢龍の勸めにより着手され，更にその遺稿を參考に供したという，いわば共著者に近い立場にあって，しかもこの二人はともに當時すでに故人となっていたと思われる點からみても，他の人人とは全く別格の存在とみなすべきであろう。梅村の名がこの二人の後に記されているということは，彼がこの二人と同格の存在もしくはそれ以下に名を連ねる人人とは一線を畫すべき人物としてこの著作に關與したことを意味するものであ

ろう。そしてこの事實は曲譜の內容からも確認しうるのである。

『南詞新譜』は，さきにも述べたように，沈璟の曲譜に新しい曲を大量につけ加えることによって成立している。この新たにつけ加えられた曲の中に，他ならぬ『秣陵春』が含まれているのである。『南詞新譜』の成立は，沈自晉が「凡例」にいう日附に從えば順治四年のことである。筆者はかつて『秣陵春』の成立年代を順治十年にさきだつ時期と考證したが，これには眞僞のほどがいささか怪しい李宜之の序文の日附以外に確證はなく，むしろ『南詞新譜』中にその曲文がみえる點から考えると，沈自南の序文の日附——つまり出版の日附であろう——の順治十四年までに後補された可能性を含みつつも，その成立年代は順治初年にまでさかのぼる可能性が高いことを認めざるをえない。ただ『新譜』中で『秣陵春』には「新傳奇」とのみ注して作者名を記さず，[94] また「これ李後主の故事」と內容まで注されている點[95]から考えて，まだ『秣陵春』が稿本の段階で——つまり世に知られる前に——曲譜の材料としてその一部を梅村が提供したとみることもできよう。ともあれこの事實は，梅村が『南詞新譜』の成立にかなり深く關與していた可能性を示唆すると同時に，その新作が模範作例として用いられるほど彼が曲律に精通していたことを示すものであろう。

『南詞新譜』と相前後して，北曲の最も完備した曲譜とされる『北詞廣正譜』が成立するが，その序を書いたのはやはり吳梅村であった。編者の李玉は蘇州派の指導者にして明末清初最大の劇作家の一人であると同時に，聲律に通じていたことでも知られ，『南詞新譜』にもその作は多くとられている。焦循の『劇說』卷四には，

元玉係申相國家人，爲孫公子所抑，不得應科試，因著傳奇以抒其憤。

元（當作玄、避諱によるかきかえ）玉（李玉）は申相國（時行）のしもべであった。申時行の孫におさえられて科擧をうけることができず，それゆえ傳奇を著して鬱憤をはらしたのである。

というが，中時行の「孫公子」が誰をさすかは定かではな

いものの，梅村は申氏一門とは親交があり，特に時行の孫にあたる紹芳とは出仕早早から宮中で親密な關係にあったばかりでなく，[96]『板橋雜記』で卞玉京の妹卞敏と關係したとされる申維久と同一人物である可能性もあり，[97]風流のお仲間でもあったようである。梅村が李玉と交際するようになったのは，おそらく申氏を通じてのことであろう。兩者の關係はかなり親密なものであったらしく，『北詞廣正譜』序には「予郡城に至りて嘗てその廬をよぎる」と李玉の家を訪れた旨記されている。李玉が梅村に序を依頼したのは，無論梅村が名士であったことによるものであろうが，同時に梅村を曲律の面においてもかなりの見識を有するものと李玉がみていたことを示すものでもあろう。梅村は李玉の代表作『清忠譜』にも序を書いている。

更に梅村は，順治十八年に出版された『雜劇三集』にも關係している。これは崇禎年間に刊行された『盛明雜劇』の後をつぐものとして出版された北曲雜劇のアンソロジーであり，衰亡に瀕していた北曲を鼓吹するという意味で，やはり當時の演劇界における重要な出版事業の一つであるが，その冒頭をかざるのは梅村の序であり，[98]收錄されている三十四種の作品の最初におかれているのも，梅村の『通天臺』と『臨春閣』なのである。

以上の事實だけでも彼が當時の劇壇で重要な地位を占めていたことは明白であるが，更に『清稗類鈔』音樂類にみえる次の逸話は，これをより端的に物語るものといえよう。(補注2)

李笠翁，名漁。……吳梅村亦識之，嘗贈以詩曰，……尤晦庵亦曰……自是而北里南曲中遂無不知有李十郎者也。

李笠翁，名は漁。……吳梅村も彼のことを知っており，次のような詩をおくったことがあった。(詩略。)[99]「十郎の才調歲蹉跎たり」の句あり）尤晦庵（侗）もまた次のような詩をつくった。（詩略。「十郎の才調福雙びなし」の句あり）これ以後その道の者で李十郎の存在を知らぬものはなくなった。

梅村と尤侗が詩をおくっただけのことで，「北里南曲中遂に李十郎を知らざるものは無し」という事態を招いたことは，そのまま吳尤兩人の劇壇における地位の高さを示す

ものに他なるまい。

これを證明するかのように，彼の集中には多くの劇作家の名を見出すことができる。さきの李漁・尤侗[100]はもとより，袁于令[101]・邱園[102]，更には詩文の贈答こそないものの，先述の李玉・沈自晉と，當時の代表的劇作家の大半が彼の交際範圍に含まれているといっても過言ではない。更に彼は，その風流人としての特性によるものか，役者や樂人とも身分を離れて廣くつきあっており，「王郎曲[103]」の役者王紫稼，「楚兩生行[104]」の蘇崑生・柳敬亭を筆頭に，樂人朱樂隆[105]や多くの妓女たちなど，その例は枚擧にいとまなく，また役者の側からも知己を以て遇されていたようである。つまり彼は江南劇壇の一中心であった。

では彼の演劇界における立場とその演劇觀はどのようなものであったか。明代後期の演劇界における最大の事件は吳江派と臨川派——沈璟と湯顯祖の對立であろう。この爭いは多分に兩人の個人的感情の衝突ゆえに激化したきらいがあり，吳江派に屬する王驥德・呂天成らも自身の師に對して批判的にならざるをえぬていのものであった。それゆえ當事者二人の死とともに一應終熄にむかうこととはなったが，この對立は實は單に曲律か修辭かという問題のみならず，更に複雜な問題——崑山腔をとるか否かがその根本に存在したのである。[106] 湯顯祖は海鹽腔を固守し，それゆえ當然のこととして崑山腔の曲律からは逸脫したために沈璟の攻擊をうけることとなった。したがってこの一事をもって湯顯祖が曲律に暗かったと斷ずることはできないのである。こうした狀勢を考えあわせると，沈璟——沈自晉による南曲譜の作成がもっていた一つの意味が明らかとなる。彼らは崑山腔を鼓吹し，他の聲腔——特に北方を支配していた弋陽腔——の擊滅をめざしていたのである。梅村は崑山に隣接する太倉に生まれた以上，幼少の頃からなじんできた音樂は崑曲であったに相違なく，『南詞新譜』編集への參加はそのあらわれとみなすことができよう。したがって彼が順治帝の御前で『秣陵春』を上演し，順治帝がその參訂者李宜之に興味を示したという逸話は，[107] 單に表面に現われた事柄以上のものを多く含む，演劇史上重要な意味をもつ事件だったのではないかと思われるのである。當時北

方では上流階級の間では崑曲も行なわれていたものの，やはり弋陽腔が主流を占め，特に滿人の間では崑曲がほとんど知られていなかったことは，『鹿樵紀聞』上にみえる次の記事からも明らかであろう。

諸公故聞其有春燈謎、燕子箋諸劇本，問能自度曲否。卽起執板，頓足而唱。諸公多北人，不省吳音，則改唱弋陽腔。諸公於是點頭稱善曰，阮君眞才子。

（清軍の）諸公は，（阮大鋮に）『春燈謎』『燕子箋』の諸作があることをつとにきいていたので，自分でうたえるかどうか訊ねた。大鋮は卽座に立ちあがって拍子木をとり，足ぶみしてうたいはじめた。諸公には北人が多く，吳音は理解できなかった。大鋮はそれとみてとると，弋陽腔にかえてうたいはじめたものである。そこで諸公はうなずきながら稱讃していった。「阮君は本當に才子だ。」

ここでいう「吳音」とは，發音と聲腔雙方を兼ねているのであろう。つまり梅村は，粗野な弋陽腔のみに親しんできた順治帝の前で崑山腔の芝居を上演したわけである。まだ少年であった順治帝が，その曲律面での參訂者李宜之について問うた――つまり梅村の北行は，これと相前後する王紫稼――梅村と親しかった役者[108]――北行とともに，崑山腔が清朝宮廷を制覇するきっかけの一つとなるものだったのではなかろうか。そしてこれは同時に，さきにもふれた順治帝を中國化・軟弱化させる試みの一つの成功した事例であるかもしれない。深く考えれば，王紫稼が後に處刑されたこともこの點とかかわりをもつかとも見えるのである。[109]

さて，梅村はおそらく吳江派の系統に屬する曲律派の作家であるわけだが，彼の作品自體は，無論曲律に叶ってはいるのであろうが，甚だ修辭が多く，吳江派がまた本色派ともいわれるその特色はもたず，むしろ湯顯祖ら文采派に近いように思われる。これは一つには彼の詩における特色が曲においても發揮されたものであろうが，今一つ重視すべきは王世貞の影響である。王世貞が何良俊と『琵琶記』『拜月亭』の優劣について論爭し，『藝苑卮言』で『拜月亭』は「大學問」がないとして退けたのは有名な事實である。[110] 更に，眞僞のほどは甚だ怪しいが世に王世貞の作とさ

れる『鳴鳳記』の白の多くは駢文を以てつづられるに及んでいる。梅村は例によってこの尊敬する先輩の行き方にならったのかもしれない。

梅村自身の演劇觀は，さきにあげた數篇の序文からある程度伺うことができる。彼は戲曲を詩詞と同樣のものとして把握し，詩→詞→曲という發展パターンを想定していたようである。この考え方は『雜劇三集』序において最も明確に主張されている。

漢魏以降，四言變爲五七言，其長者乃至百韻。五七言又變爲詩餘，其長者乃至三四闋。其言益長，其旨益暢，唐詩宋詞，可謂美備矣。而文人猶未已也，詩餘變而爲曲。

漢魏以降，四言詩は變化して五言・七言となり，長いものは百韻をかぞえるに至った。五言七言が更に變化して詩餘となり，長いものは三、四闋（曲のくりかえし）に至った。ことばが長ければ長いほど，內容もわかりやすくなるのであって，唐詩と宋詞は，充分すぐれたものであったといえよう。しかし文人はなおもやめようとせず，詩餘は變じて曲となった。

したがって，曲の中最もすぐれたものである元曲は，唐詩・宋詞とも充分に比肩しうるものであり，それゆえあの「漢文唐詩宋詞元曲」という標語は，彼にとっては全面的に肯定すべきものであった。彼は『北詞廣正譜』の序で，くりかえしこの文句をひいている。この標語が元末葉子奇によってはじめて提示されたことは周知の通りであるが，それが明代を通じて廣く流行するに至ったについては，復古派との關係を抜きにして考えることは不可能であろう。復古派が「漢文唐詩」をその模範としていたことはいうまでもないが，明代には顧られることの少なかった詞は別として，「元曲」もまた復古派の人人にとっては古典だったのである。復古派詩人の多くが同時に劇作家でもあったことは，つとに指摘されている通りである。前七子の王九思・康海，『浣紗記』の作者梁辰魚，湯顯祖の友人屠隆など，いずれも詩文においては復古派のメンバーであり，特に王・康兩人は北曲の作者として知られていた。また王世貞もこの分野で名聲があったこと，再三說く通りである。

そして彼らが劇作にあたっては元雜劇を典型として祖述したこと，これも演劇史家のこぞって說くところである。つまり梅村のこの考えは一面において彼の復古派的側面を示す。

しかし同時にこのことは彼の別の一面をも示しているのである。演劇の地位は――それが演劇自身にとって幸いであったか否かは別として――文人がその創作に參加することにより，明朝一代を通じて著しく向上しはしたが，詩文と同列にまで意識されることはあまりなかった。しかるに梅村はここで元曲について「眞に漢文唐詩宋詞と鏟を連ね轡を並ぶ」[111]といっているのである。こうした俗文學を傳統詩文と對等に評價する姿勢は，むしろ反復古派――李卓吾の影響下にあった公安派のものであった。つまり演劇觀においては，明代諸派の說が梅村の中に混在しているのである。

彼の戲曲と詩文とをひとしなみに評價しようとする姿勢は，その戲曲のとらえ方にも現われている。彼によると，戲曲とは不遇の士がその「無聊不平の慨」を胸のなかにためこんでどうしようもないとき，それを發散するためにつくるものであり，[112]更に彼は李玉の『清忠譜』を評して「塡詞というといえども，これを信史と目するも可なり」というに至っている。つまり梅村が詩をもって史を記したといわれるのと同樣，李玉は曲によって史を傳えたとみなすのであり，これは彼が演劇の價値を重視していたことを示す一傍證であると同時に，後に說くように梅村の史詩について考える上でも重要な意味をもつ言葉である。

注

(1) 吳梅村の諱は偉業、字は駿公。ここでは一般に廣く知られた彼の號「梅村」によってその名を記すこととする。
(2) この句は陸機「文賦」に基く。
(3) 「白林九古柏堂詩序」(『梅村家藏稿』卷二十九)。
(4) 『家藏稿』卷十。
(5) 梅村と文果の關係を證するものとして「贈文園公」(『家藏稿』卷十一)の大作がある。
(6) 『家藏稿』卷二十八。
(7) 「王母周太安人墓誌銘」(『家藏稿』卷四十九)。
(8) 『觚賸』卷一　吳觚上「酒芝」。
(9) 錢謙益『列朝詩集小傳』丁集上「王尙書世貞」附見「王

司勛士騏」。また同「王少卿世懋」。前者は士騏が自作の庭園――つまり「梅村」の前身――によって自身と父との考えの違いを示したとし、後者では世懋の孫瑞國――梅村の親友――が錢謙益の「弇州晩年の論を聞きて、家集を繙閲し、源委を扣擊して、深くわが言を以て然りとなす」という。意識的に梅村と關わりのある事柄ばかりを並べたのは、あるいは錢謙益の梅村に對する微意の存するところかもしれない。ただし「弇州晩年の論」の說に疑わしい點がある ことは、顏婉雲「王世貞悔作巵言說辨」(『中國文學報』三十五) 參照。

(10) この點については松下忠『明清の三詩說』(一九七七 明治書院) に詳しい。

(11) 「京江送遠圖歌」序 (『家藏稿』卷十)。

(12) 『家藏稿』卷五十七。

(13) 『家藏稿』卷三十八。

(14) 『家藏稿』卷四十三。

(15) 『家藏稿』卷四十六。

(16) 『家藏稿』卷五十二。

(17) 『家藏稿』卷二。

(18) 『梅村先生年譜』天啓四年。

(19) 杜登春『社事始末』。

(20) 同右。

(21) 『家藏稿』卷三十八。

(22) この點については注 (21) でも引いた「顧母陳孺人八十序」參照のこと。

(23) 「復社紀事」(『家藏稿』卷二十四) 參照。

(24) 『社事始末』。

(25) 『明史』卷二百八十八。

(26) 松下忠前揭書六十八頁以下。

(27) 李卓吾を彈劾した張問達は東林黨のメンバーである。

(28) 『明季北略』卷三所引阮大鋮「點將錄」。

(29) 吉川幸次郎「錢謙益と清朝『經學』」(全集第十六卷五五頁以下)。

(30) 「兩郡名文序」(『家藏稿』卷三十四)。

(31) 『明史』卷九十六。

(32) 靳榮藩『吳詩談藪』所引。

(33) 『家藏稿』卷三十。

(34) 『社事始末』。

(35) 『穆苑先墓誌銘』(『家藏稿』卷四十六)。

(36) この點については葉君遠「吳偉業生平考辨」(『明清詩文研究資料集』第二輯 一九八六 上海古籍出版社) に詳しい考證がある。

(37) 陸世儀『復社紀略』卷二參照。

(38) 『家藏稿』卷三十四。

(39) 陳廷敬「吳梅村先生墓表」。

(40) 「送林衡者還閩序」(『家藏稿』卷三十五)。

(41)　「與子璟疏」。
(42)　『牧齋初學集』卷三十九。
(43)　『牧齋初學集』卷二十。
(44)　『家藏稿』卷三十八。
(45)　『吳梅村詩箋注』卷五「癸巳春日禊飲社集虎邱卽事」の題注。
(46)　『家藏稿』卷五十七。
(47)　いずれも『家藏稿』卷五十四。
(48)　『家藏稿』卷四十六。
(49)　顧湄「吳梅村先生行狀」。
(50)　『家藏稿』卷三十。
(51)　拙論「吳偉業の戲曲について」(『東方學』七十一所收)參照。
(52)　顧湄「行狀」。
(53)　『梅村詩話』龔鼎孳の項及び「贈總憲龔公芝麓」(『家藏稿』卷十一)・「龔芝麓詩序」(『家藏稿』卷二十八)參照。
(54)　「雕橋莊歌」并序(『家藏稿』卷十一)・「梁水部玉劍尊聞序」(『家藏稿』卷三十二)參照。
(55)　孟森「「奏銷案」(『心史叢刊』一集《一九三六　大東書局、一九八六　岳麓書社》所收)。
(56)　陳寅恪『柳如是別傳』(上海古籍出版社、陳寅恪文集七)下卷八九五頁以下。
(57)　第八節を參照。
(58)　『家藏稿』卷十九。
(59)　注(46)參照。
(60)　注(36)參照。
(61)　「爲柳敬亭陳乞引」「爲周弘叔勸引」(ともに『家藏稿』卷二十六)。
(62)　『家藏稿』卷四十八。
(63)　「惠山二泉亭爲無錫吳邑侯賦」(『家藏稿』卷十七)・「雲起樓記」(同卷四十)・「吳母孟恭人墓表」(同卷五十)。
(64)　ともに『家藏稿』卷十。
(65)　孟森「科場案」(『心史叢刊』一集所收)の所說。
(66)　『家藏稿』卷十三。
(67)　『家藏稿』卷三十三。
(68)　『家藏稿』卷四十。
(69)　詳しくは陳寅恪『柳如是別傳』第五章「復明運動」の後半を參照。
(70)　「與子璟疏」。
(71)　詳しくは『社事始末』參照。陸鏊の告發の時期は、「與子璟疏」では奏銷案の後、『社事始末』では前となっており定めがたいが、おそらくは當事者である梅村の言の方が確かであろう。
(72)　『家藏稿』卷二十四はこの文によって獨占されている。
(73)　『家藏稿』卷三十三。
(74)　『家藏稿』卷四十。

(75) 『家藏稿』卷四十八。
(76) 『家藏稿』卷五十四。
(77) 白登明については「白林九古柏堂詩序」(『家藏稿』卷二十九) 及び『清史列傳』・「循吏傳」參照。
(78) 顧湄「行狀」。
(79) 『家藏稿』卷十。
(80) 『家藏稿』卷六。
(81) 『家藏稿』卷三。
(82) 「贈寇白門」六首 (『家藏稿』卷八)。
(83) 「楚雲」八首并序、「山塘重贈楚雲」四首 (ともに『家藏稿』卷八)。
(84) 「贈妓朗圓」(『家藏稿』卷八)。
(85) 「細林夜集送別倩扶女郎」(『家藏稿』卷十四)。またこの時のことは毛奇齡『西河詩話』に詳しい。
(86) 『家藏稿』卷六。
(87) 程穆衡『吳梅村詩箋注』卷三。
(88) 梅村と瞿式耜の關係については、『梅村詩話』瞿式耜の項及び「後東皐草堂歌」(『家藏稿』卷三) 參照。
(89) 陳寅恪『柳如是別傳』下卷一〇二二頁。
(90) 『家藏稿』卷十一。
(91) 王時敏に贈った詩文は「西田詩」(『家藏稿』卷一) 以下多數にのぼる。王鑑には「送王玄照」(『家藏稿』卷十二) 及び八首連作の同題「送王玄照」を贈っている。楊文驄については、「讀楊文驄題走馬詩於郵壁。漫次其韻」二首 (『家藏稿』卷十五) の作あり。程嘉燧とは、楊廷麟が太倉を訪れた折、梅村は「臨江參軍」(『家藏稿』卷一) をつくり、程嘉燧は「髯參軍圖」を畫いたという『梅村詩話』の記事から交際のあったことを確認できる。邵彌のために梅村は墓誌銘を書いており (「邵山人僧彌墓誌銘」(『家藏稿』卷四十六)、また兩人が親密な友であったことは「沈伊在詩序」(『家藏稿』卷三十) にも見える。更に、『家藏稿』には未收だが、「寄題僧彌頤堂」「懷邵僧彌讀書山中」の二篇が『江左三大家詩鈔』卷上に收錄されている。
(92) 「白燕吟」序 (『家藏稿』卷十) にみえる。
(93) 注(51)參照。
(94) 冒頭の「詞曲總目」。
(95) 卷八〔金菊對芙蓉〕。
(96) 「申少觀六十序」(『家藏稿』卷三十七)。
(97) 陳寅恪『柳如是別傳』中卷七七九頁にこの點についての考證がある。
(98) 『北詞廣正譜』『清忠譜』『雜劇三集』の序はいずれも『家藏稿』未收。
(99) 「贈武林李笠翁」(『家藏稿』卷十六)。
(100) 「永平田君宗周吳故學博也。哀重其識之，尤展成司李其地，相見詢哀年百有二矣。索詩記異并簡展成」(『家藏稿』卷十七)。また『吳詩談藪』に「題尤展成水亭垂釣圖」二

首を收める。

(101)　「贈荆州守袁大蘊玉」四首（『家藏稿』卷十六）。

(102)　「觀蜀鵑啼劇有感」四首并序（『家藏稿』卷十七）。

(103)　『家藏稿』卷十一。

(104)　『家藏稿』卷十。

(105)　「聽朱樂隆歌」六首（『家藏稿』卷八）。

(106)　岩城秀夫「湯顯祖研究」第五章「戲曲構成の技法と理論」第二節の四（『中國戲曲演劇研究』（一九七三　創文社）三七九頁以下）「沈璟と湯顯祖――『還魂記』の改作をめぐって――」（『中國古典劇の研究』二九四頁以下）。

(107)　注(51)參照。

(108)　注(103)參照。

(109)　王紫稼については孟森「王紫稼考」（『心史叢刊』二集所收）參照。

(110)　詳しくは青木正兒『支那近世戲曲史』（全集第三卷）八十七頁以下參照。

(111)　『北詞廣正譜』序。

(112)　同右。

(補注1)　一九八六年に出版された『中国大百科全書・中国文学Ⅱ』圖版の六十六頁に吳梅村の書畫の寫眞が掲載されている。

(補注2)　このことは徐釚『本事詩』卷十一余懷の項に詳しく記されており、『清稗類鈔』はこれに基いたものであろう（伊藤漱平氏の「『李漁の戲曲小說の成立とその刊刻』補正」（『二松學舍大學大學院紀要』第二集）注54におけるご教示による）。